おこうだより

特集　「地域に根ざした医療人の育成」

第68回西日本医科学生体育大会で優勝の医学部サッカー部（上段）、医学部弓道部（下段）

第14号　平成29年3月

高知大学医学部

おこうだより第14号　目次

巻頭言「医療でAIと共生する」　医学部長　本家　孝一　1

特集記事「地域に根ざした医療人の育成」

社会に貢献しうる大学教育実現のための学生指導の状況と今後の取り組みについて　医学科長　降幡　睦夫　3

看護学科における教育改革の取り組み　看護学科長　栗原　幸男　5

医療人育成支援センターの設置　医療人育成支援センター長　渡橋　和政　7

医学部後援会や同窓会の取り組み

医学部後援会の取り組みについて　医学部後援会会長　松浦喜美夫　8

医学部同窓会　医学科同窓会会長　廣瀬　大祐　10

看護学同窓会の役割　看護学科同窓会会長　寺下憲一郎　11

「退任にあたって」　分子細胞生物学教室教授　富永　明　12

新任教授紹介

生理学講座（統合生理学）教授就任のご挨拶　生理学講座（統合生理学）教授　山口　正洋　14

病態情報診断学講座教授新任のご挨拶　病態情報診断学講座教授　検査部・輸血・細胞治療部部長　松村　敬久　16

泌尿器科学講座教授就任のご挨拶　泌尿器科学講座教授　井上　啓史　18

次世代医療創造センター教授就任のご挨拶　次世代医療創造センター教授　仲　哲治　19

基礎看護学講座教授就任の挨拶と1年を終えて　基礎看護学講座教授　森木　妙子　20

臨床看護学講座教授就任のご挨拶　臨床看護学講座教授　山脇　京子　21

平成28年度看護学科防災訓練を実施して　学部災害対策室協働WG委員長　森木　妙子　23

学生の活動

学生の取り組み

～自分を伝えるということ～（WJEMA主催スピーチ大会で2015年,2016年に優勝）　医学科2年生　間崎　護　25

ワシントンD.Cで開催された第3回デフバレー（聴覚障がい者バレーボール）世界選手権に日本代表として出場　医学科6年生　狩野　拓也　27

学生関係行事（写真掲載）　29

留学体験　＜医学科、看護学科＞

ハワイ大学医学部"Summer Medical Education Institute"に参加して　医学科5年生　高橋佐和子　35

台湾大学派遣プログラムレポート　看護学科3年生　竹崎　愛　36

第63回よさこい祭り　醫ーKUSUSHIー　くすし代表　医学科3年生　菅原　拓真　37

「第36回南風祭」を終えて　南風祭実行委員会委員長　医学科2年生　川瀬　博也　39

課外活動紹介

医学部「サッカー部」～西医体を終えて～　サッカー部主将　医学科3年生　小林　海里　41

「医学部弓道部」　医学部弓道部代表　医学科3年生　南　玲　43

「高知大学医学部水泳部」　医学科3年生　金　潔駿　45

「災害医療研究会」南国警察署とヘリコプターによる合同防災訓練を通して　災害医療研究会部長　看護学科3年生　吉原　大貴　47

その他

平成28年度「白衣授与式」の実施について　学生課長　立花　広枝　49

医学部振興基金　50

学部准講会について　准講会副会長看護学科　松岡　真里　53

平成28年度入学試験（H26～28年度 志願者・受験者・入学者数一覧）　55

平成28年度学生数　56

医師国家試験、保健師・看護師国家試験 合格状況　57

平成28年度医学部後援会表彰団体・表彰者　61

編集後記　おこうだより編集委員会委員長　井上　啓史

巻 頭 言

「医療でＡＩと共生する」

医学部長　本 家 孝 一
（平成28年4月1日就任）

昨年４月より医学部長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

今年の１月20日の日本経済新聞電子版に医師国家試験を解答する人工知能（ＡＩ）の話が出ていました。慶應義塾大学理工学部の榊原康文教授のグループが開発したＡＩは、国家試験の臨床問題を正答率55.6％（国家試験合格者の平均正答率は66.6％）で解答するところまで来ているそうです。国立情報学研究所の新井紀子教授がリーダーとなって開発してきた東京大学合格を目指すＡＩ「東ロボくん」は、未だ自然言語の意味を理解することができないので東大入試を断念しましたが、東大入試プレ（代々木ゼミナール）の理系数学では６問中４問を完全正答し、偏差値76.2点を獲得しました。ＡＩが将棋や囲碁でプロの棋士に勝ったというニュースが話題になりましたが、将棋や囲碁という非日常的なゲームの枠を越えて、試験という現実的な課題においても、最難関の試験問題にここまで対処できるのは驚きです。もっとも、質問と答えの関係が明確な医師国家試験や入学試験はＡＩの学習素材として適しているようですが。

いま第三次ＡＩブームで、今度こそ本当に実現できるのではないかと注目を集めています。ブレークスルーは、コンピューターの飛躍的な計算速度のパワーアップとディープラーニングという新しい機械学習方法の開発で、これによりＡＩが自らデータを分析して特徴量を抽出できるようになりました。つまり、コンピューターが自ら考え適応することが可能になったということです。ディープラーニングを使うことで画像認識や言語の関連づけが可能となりました。東京大学大学院工学系研究科の松尾豊特任准教授によると、生物でいえば“眼”を獲得したに匹敵するとのことです。

昨年、ＡＩに関する啓蒙書が多数出版され、最近、新聞でも自動運転などＡＩの社会実装に関するニュースをよく目にするようになりました。間違いなくＡＩは指数関数的に進歩しますので、今後、ＡＩが社会や産業をどう変えていくかを注視していく必要があります。ＡＩが今ある職業の半分を奪うともいわれています。ＡＩは医療分野にもどんどん入ってくるでしょう。既に、高度な画像診断技術はコンピューター制御下にあり、ロボット手術装置が導入され、臨床検査やカルテもデジタル化が進んでいますので、近い将来、知識や技術ではＡＩが人間の医師を越える時代が来るかもしれません。医師国家試験を解答するＡＩは、症例問題から性別や年齢、症状、診察所見、検査データから特徴量を抽出し、患者の症状プロファイルを作ります。それぞれの特徴量に重み付けをして加算する疾患名を導き出す関数式を作り上げます。各特徴量に付ける重み付けの初期値は適当でも、医師国家試験のプール問題を学習することにより、ＡＩがそれぞれの重み付けの値を変えていき、だんだん正しい答えを導き出すようになります。研修医と同じように、国家試験の次は臨床現場でのトレーニングです。ＡＩは膨大な文献や症例を分析、関連付けすることができ、既に、ゲノム医療や癌の診断支援システムでの利用が始まっています。

今後、ＡＩ技術の発展、普及とともに、知識およびデータの標準化、集約化が進むと思われます。いわば知のグローバル化です。医療のＡＩ化が進

めば、診断や治療はＡＩが定めたアルゴリズムに従って行われるようになり、日本中どこでも同じ質の医療が受けられるようになります。そのような時代が来たら、医師は何をすればよいのでしょうか。きっと、人間にしかできないことがあるはずです。ＡＩに動かされるのではなく、ＡＩを使いこなす能力・センスと、ＡＩが真似できない人間らしさがこれからの医師には求められます。そのためには、他者に共感でき、主体的に考え行動できる医師になることが最も重要で、知能では情報医療学と人文社会学がキーとなると思います。

特集　社会に貢献しうる大学教育実現のための学生指導の状況と今後の取り組みについて

医学科長　降幡睦夫

文部科学省から国立大学法人における大学改革実行プランが示されたことも受け、社会に対して貢献できうる高度な知的人材育成機関としての大学の役割強化が、これまで以上に認識されるようになりました。このような状況下にて、高度専門職業人養成を主目的とする医学分野での学生教育へのミッションの再評価が求められ、各大学それぞれの地域事情に見合う独創的・個性的な医学教育への計画策定が求められる中、本学においても医学教育改革向上計画が進行しつつあり、そのいくつかをご紹介致します。

まず、社会における大学のあり方、すなわち社会・学生に対する医学部医学科としての教育における責任体制を明確にする目的で、以下の目標項目を検討致しました。

1．社会に対する医学部医学科としての責任体制：
①医師に相応しき素質と意欲を有する学生を入学させ教育すること。
②すべての医学科学生を卒業させ、医師国家試験に合格させること。
③一人でも多くの初期研修医を本学附属病院にて直接研修指導すること。
④本学及び県内医療機関の将来を担う優秀な医師を育てること。

2．学生に対する医学部医学科としての責任体制：
①学生が健全な学生生活を営むことができる環境を提供すること。
②すべての学生に、医学を通して医師となるべき自覚と責任を促すこと。
③すべての医学科学生を卒業させ、医師国家試験に合格させること。
④本学及び県内医療機関の将来を担う優秀な医師を育てること。

これら目標項目を踏まえた上で、医学部医学科としての、今後の具体的な学生指導取り組みに関しましては、優先事項として、国際認証評価基準を満たす教育カリキュラムの改変に関する事項で、具体的には、初学年における教養課程カリキュラムの充実化、増加するクリニカルクラークシップ配分時間内容と現行カリキュラムの均整のとれた圧縮、卒業試験の実施時期及び期間の再評価、５，６年次生に対して医師国家試験を意識した講義および実習内容を盛り込む教育の施行等を検討しております。

昨年改変したアドバイザー教員制度の効率的な運営も課題の一つであり、学生には、学務委員会・医学教育創造推進室・アドバイザー教員・保健管理センター及び学生課スタッフが一体となって対応し、医師となるべき自覚と責任を持たせる事を目標とした指導を行ないます。修学困難な問題を抱えた学生に対しては、それら学生の進路変更も視野においての修学、進級指導に当たります。アドバイザー教員は、基本的にはその学年で開講される科目担当教員が担当し、１－４年次学生に対してはそれぞれ15－20名のグループに１名の教授もしくは准教授を、５－６年次学生にはそれぞれ２－３名のグループに１名の教授もしくは准教授に、各１名の講師を加えた２名の教員を配置する体制をとっています。更に教員学生間の親睦と意見交換を図る目的で、各学年毎年２回程度の懇

談会を開催しています。

なお、アドバイザー教員にて対応困難な問題が生じた際には、保健管理センター、医学教育創造推進室、学生課スタッフ及び学務委員長が共に対応する制度も完備しております。

初年次学生には学業のみならず新しい環境適応へのサポートが必要であります。それをふまえて専門科目を意識した基礎科目の修得と、教養育成のための科目修得も検討しており、実際、EMEや昨年度より開講された医学概論は学生の高い関心を集めています。２年次より専門基礎科目が始まり、４年次二学期前半までには臨床科目も修得完了となりますが、この間、専門科目教育を通して医師となるべき自覚を促し、４年次後半における共用試験（OSCE、CBT）対応により、臨床実習に必要な知識と診察手技を確認させます。５年次以降はクリニカルクラークシップ参加により、医師となるべき覚悟をもたせ、アドバイザー教員及び臨床各科を中心とした進路指導を積極的におこない、本学マッチング率向上にも貢献できる体制強化を行っています。

また、２年次から４年次にかけては、独自性の高いリサーチマインドを持った医師・医学者を育成することを目的とした先端医療学コースが、正規授業の専門科目として組み込まれています。毎年20名以上の新規履修者があり、履修学生の学会発表での受賞など良好な成果が現れ始めており、今後もこうした授業プログラムをさらに発展させたいと考えます。

６年次は卒業試験を控える最終学年であり、卒業試験の開始時期・期間・内容について、卒業試験自体が国家試験合格にも貢献できうるようその内容の再評価を行っています。

医師国家試験対策としては、自主学習室等の環境整備、アドバイザー教員・医学教育創造推進室・医師養成強化対策チームによる個別学生指導、国家試験模擬試験受験の義務化及びその費用負担軽減、更には学生の希望に応じたミニレクチャー開講等に現在積極的に取り組んでおります。義務化した模擬試験の学生個人結果は医師養成強化対策チームにて把握し、必要に応じてアドバイザー教員または科目担当教員に提供し、国家試験対策に活用しています。既卒者に対しても、医学教育創造推進室を中心としたサポートを行なっています。

すべての医学科教職員は、各自の学生教育内容に対する再評価と、それを踏まえての意識改革に真剣に取り組んでおります。そして、それらを各講義・実習・クリニカルクラークシップ等に反映することで、すべての６年次生および既卒業生が国家試験に合格し、一人でも多くの卒業生が、本学における研究教育・医療活動、更には高知県下の地域医療を担う優秀な医師となれるよう、今後医学科教員が一丸となって取り組んでいく所存です。

特集

看護学科における教育改革の取り組み

看護学科長　栗原幸男

看護学科は平成10年４月に高知医科大学医学部に新たに開設され、来年度の平成29年度で20年目に入ります。この間一貫して、本学科が育成する人材像は変わっていません。「豊かな人間性と高い倫理観に裏付けられた感性を持ち、看護をグローバルな視点からとらえ、人々の健康生活向上のために援助し、看護学の発展に貢献しうる想像力を有する人材」です。当初この人材育成を行うため、看護が対象とする人間とその健康を学ぶ科目群（対象論科目）、ひとを取り巻く社会・文化およびサイエンスを学ぶ科目群（環境論科目）、看護活動をために必要な知識・方法・技能を学ぶ科目群（看護活動論科目）および国際看護活動や看護研究等を学ぶ科目群（総合看護科目）により、カリキュラムを構成していた。

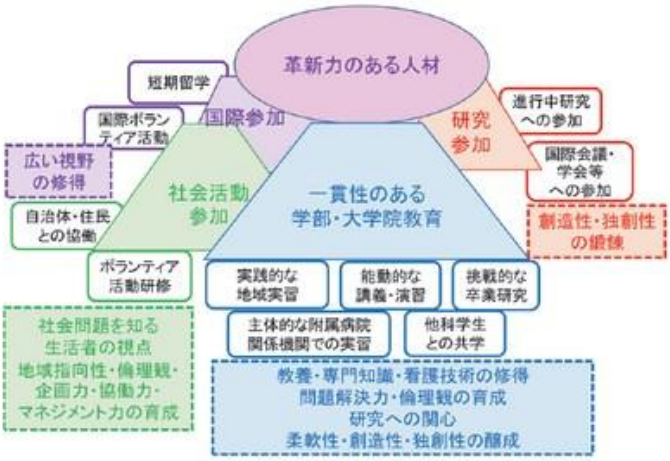
平成15年９月に高知医科大学医学部が高知大学に統合されたことにより、履修科目の幅が広がり、養護教諭と高校看護科教諭になることが可能になりました。これに合わせて、学生のニーズに合わせた科目履修ができるように、カリキュラム構成を変更しました。平成22年４月よりスタートした高知大学第二中期計画での教育改革では、学生の問題解決能力・コミュニケーション力・表現力・協働実践力の育成と卒業時点での看護技術到達度を高める取組を行いました。第二期中に各能力および看護技術到達度を学生が自己評価する評価指標を作成し、各学年で実施しました。その結果、４年間での各自の能力修得状況が把握することが可能になりましたが、回答項目が多く学生の負担が大きいことから、現在は評価指標の利用を停止しています。今後スリム化した評価指標に改良し、学生の修学状況把握・指導に利用したいと考えています。

本年度（平成28年）から始まった第三中期では、地域との協働を通じて学生が社会で活躍できる能力の育成を全学の方針として掲げています。看護学科でも学生が地域のボランティア活動や看護学科の地域自治体への支援活動に主体的に取り組めるように、学生だけなく教員の研修も行う取組を始めました。また、看護師養成において四年制大学教育が急速に進む中で、看護学生の卒業時の技術到達度を高め看護実践力のある看護師を育成することが強く求められております。本学では医学部附属病院での実習が看護技術到達度を高める上で大きなウエイトを占めていますので、附属病院看護部との連携を強め、より質の高い臨地実習が行えるよう取り組んでいます。卒業時の看護実践力をより高めることについては、選択教育プログラムとして４年生で看護師実践力育成科目を配置し、救急医療や在宅医療で必要な看護技術を学べるようにしています。

近年看護系四年制大学が急増しています。本学科が開設された平成10年には約60校でしたが、平成28年度には約260校に達しており、今後も毎年10校程度の新設が予定されています。その中で国立である高知大学看護学科の教育の質を高め、特色を出すことが求められていると認識しています。日本の医療環境は大きく変わろうとしており、これから数十年で現在とは全くことなる医療体制になる可能性があります。また、外国との繋がりはますます強くなり、国際的な医療活動も日本に今まで以上に求められるようになると予想されます。したがって、そのような大きな変化に対応できる適応力と新しい医療を切り開ける発想力、それら

を併せて革新力と呼ぶことにしますが、その革新力のある看護系人材を育成することが重要と考えております。今後、そのような人材育成ができるよう教育改革に取り組んで行きたいと考えておりますので、ご理解・ご支援・ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

課程教育をベースにさまざまな体験と実践によって
生まれる革新力のある人材の育成



特集

『医療人育成支援センター』の設置について

医療人育成支援センター長　渡　橋　和　政

昨年４月に発足した『医療人育成支援センター』について、紹介させていただきます。このセンターは、学生教育（特に臨床技能育成）から初期臨床研修、専門医研修、さらにキャリア形成までをシームレスに支援することが目的です。また、この目的のために、情報を一元管理するためのInstitutional Research (IR)部門もセンターの基盤として整備中です。

従来の枠組みでは、これらがそれぞれ別組織で行われていたために、一貫した支援や情報共有が必ずしも十分とはいえない面がありました。今後、学部教育、初期研修ではその内容と成果を評価される時代となり、専門医の育成に関して新専門医制度が始まります。新たに『総合診療専門医』も登場するタイミングで地域枠の卒業生も増え、従来とは異なるキャリア形成の道を模索する若手医師も増えてくるでしょう。そのような時代のニーズに少しでも応えることができるしくみを充実させたいと思っています。具体的には、大学の各教室、診療科・部門はもちろんのこと、県内の各病院、医師会、高知医療再生機構や地域医療支援センターと連携をしながら活動してまいります。高知県には、医療人を育成するためのシーズや有能で熱意あふれる先輩方がすでに多くあります。その力を結集して、効率的に若手の育成に役立てたいと願い、高知県の明日に架ける７色の橋をイメージしたロゴを掲げました。

これまで、高知大学は同窓生との緊密な連帯感が必ずしも十分とはいえなかった感がありますが、今後それを少しでも深めていければと思っていますし、このセンターの活動がその一助となれば、と期待しています。同窓会の先生方や学生、卒業生のご家族の方とのつながりも大切です。ぜひ、ご意見、アドバイス、要望などをいただきながら、このセンターが卒業生とともに育っていければと願っています。

医学部後援会の取り組みについて

医学部後援会会長　松　浦　喜美夫

高知大学医学部後援会は1978（昭和53）年４月に医学部の前身である高知医科大学の開学時に、在学生の課外教育及び福利厚生に関する事業を援助し、大学の発展に寄与することを目的に発足しました。会員は高知大学医学部に在籍する学生の保護者を正会員として、本会に賛同する者を賛助会員としています。平たく言えば、保護者の皆様のご支援によって運営されるPTAのような組織です。本後援会は会員の中から各学年３名の理事が選出され、年数回の理事会と年1回の総会を４月の入学式後に毎年開催し事業計画や予算などを決定しております。

平成25年４月から子供が医学部にお世話になることになり、後援会の理事に推挙され、平成28年４月より会長を拝命いたしました。会員の皆様には、日頃から後援会活動にご支援ご協力をいただき、感謝申し上げます。私は以前に、高知医科大学の教職員として講義や臨床実習などで学生との接点を持っており、退職後も地域の病院で医学生の実習も引き受けております。親と教育者の両方の立場で後援会にお手伝いできればと思っており、微力ではございますが、後援会の益々の発展に尽くす所存でございますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

後援会の事業については、当初は部活動などの課外活動への援助や福利厚生に関する援助が主でしたが、設立後40年を経過し、時代の変遷、大学の発展、医学教育の変化などに伴い事業内容の見直しが図られ、近年では国家試験対策や臨床実習前の全国共用試験の補助などにも幅広く事業展開しています。現在の事業内容について表にも示しましたが、大きく分けると、学生の諸活動に対する支援と大学の諸事業に対する支援に分けらます。会員から寄せられた入会金と会費を基に，学生の課外活動や諸行事等に対し援助していますが、具体的に以下に報告します。

学生の諸活動に対する支援は、

1．学内行事への支援（入学後に行われる新入生歓迎行事、よさこい祭りへの参加、大学祭南風祭の運営、学位授与式、卒業式等への支援）

2．西日本医科学生総合体育大会（以下：西医体）への助成等（西医体大会への参加、西医体で優勝準優勝部の全日本医科学生総合体育大会王座決定戦への出場、西医体への評議委員旅費支援、西日本看護学生・コメディカル体育大会参加、中国・四国地区大会の主管支援等の体育大会への参加や主催への助成です。）

3．課外教育援助（体育大会景品への助成、体育会系22部、文化系26のサークル課外活動への助成、課外活動団体代表者等へのリーダーシップセミナーの開催と講師招聘、クラブ活動に対する各種保険掛金の支援等）

4．国家試験支援（国家試験対策として情報の収集や、国試会場へのバス代等の支援、模擬試験の受験を助成し合格を支援）

大学の諸事業に対する支援は、

5．教育奨励　（入学後の１泊２日の新入生合宿研修、アドバイザー教員との懇談会、オープンキャンパス参加協力に対する謝金、臨床実習開始前の４学年生に行われる全国共用試験に対する支援等）

6．優秀表彰　（課外活動、西医体等での成績が３位以上の団体個人に対し表彰、学業優秀者に対し医学科１～５年、看護学科１～３年　各学年から１名表彰）

7．その他　（協力団体一般財団法人“爽風会”献体に対する助成、医学部振興基金等への助成）

福利厚生では、

8．福利厚生　（学生教育研究災害障害保険料、

学生の負傷に対する見舞金、実習前の肝炎感染予防のためのB型肝炎ワクチン接種等補助）

その他では、

9．各種積立金（遭難時の捜索費用に充てるための救難対策積立金、西日本医科学生総合体育大会の主管校となるための当番積立金等）

以上のよう助成事業を行なっています。

私たち医学部の保護者としましては、医学部教職員と協力して、この充実した環境の高知大学医学部で、子供たちが楽しく健全に研鑽し、充実した学生生活をおくってもらい、無事卒業し、国家試験に合格して、新しい医学医療を担う良き医療人としての素養を磨きあげることを願っております。

後援会としましては、今後も在学生の教育・課外活動等の援助を続けて参りますので、ご理解とご協力よろしくお願いいたします。

表

学内行事関係	新入生歓迎行事
	よさこい祭り参加補助
	大学祭運営費補助
	医学部学位記授与式等への補助
	卒業式へのバス借上料
西医体助成等	全医体、中国・四国大会主管
	全医体出場祝金
	西医体・全医体負担金等
	西医体評議員出張旅費
課外教育援助関係	体育大会賞品
	リーダーシップセミナー
	体育会、文化会課外活動費
	準硬式野球部活動補助
	保険掛金
国家試験助成関係	国家試験助成
	模擬試験補助
教育奨励関係	新入生合宿研修
	アドバイザー教員との懇談会等補助
	オープンキャンパス協力謝金
	学外実習経費補助
	共用試験に伴う補助
その他事業関係	学生部会補助
	課外活動団体表彰
	学業等優秀者表彰
	“爽風会”献体に対する助成
	感謝及び慶弔
福利厚生関係	学生教育研究災害障害保険料
	学生負傷見舞金
	Ｂ型肝炎ワクチン接種等補助
積立金	救難対策積立金
	西医体当番積立金

医学部同窓会

医学部同窓会会長　廣 瀬 大 祐

高知医科大学は昭和59年春に１期生を送り出し、その同窓会組織として高知医科大学同窓会が発足しました。平成15年10月の新高知大学誕生により平成16年には同窓会組織も高知大学医学部同窓会に名称を変更しました。

高知大学医学部の基本理念は「人間性豊かな医療人づくり」「地域医療に密着した学風づくり」となっています。これは高知医科大学の建学の精神「敬天愛人」「真理の探求」を受け継いでいると思っています。

「敬天愛人」「人間性豊かな医療人づくり」は医療を、「真理の探求」「地域医療に密着した学風づくり」は医学を表す言葉と考えます。医療と医学ともに備えた医師こそが高知医科大学・高知大学医学部の建学の精神と考えています。

残念ながら大学では医学中心となってしまい、社会から必要とされている医療全体、介護・福祉・障害との連携などは十分とは言えません。

それを補完していくのが同窓会組織であり、高知県内のみならず、日本全国・海外で活躍されている同窓生だと考えています。

高知大学医学同窓会は大学と同窓生とを、同窓生同士をつなぐ組織として今後も活動を続けていきます。

平成29年度の活動予定は奇数月の最終水曜日午後７時から理事会、４月には４月５日（水）臨床研修医オリエンテーションにて高知県医師会と合同説明会４月７日（金）臨床実習スタート５年生への白衣授与式があります。

詳しい予定や前回・今回の「やまもも」は全面更新したホームページに掲載しております。写真はフェイスブックにアップします、是非ご覧になってください。

また平成29年８月５日（土）ホテル日航高知旭ロイヤルにて同窓会総会を開催します。午後５時から総会、６時から講演会、７時から懇親会の予定です。詳細はホームページに掲載します。医学部生・同窓生の積極的参加をお願い申しあげます。

看護学同窓会の役割

高知大学看護学同窓会会長　寺　下　憲一郎

看護学同窓会は平成19年４月１日に発足し、高知医科大学から始まった看護学科が、今は高知大学の看護学科として多くの学部・修士の卒業生を輩出しております。

現在、学部卒の同窓生数は1,100名を超え、修了生においても150名を超える方々がご卒業され、様々な場においてご活躍をされています。

このような数多くの同窓生に対して、看護学同窓会は会員相互の親睦を図り、福利厚生や高知大学の発展に協力することを目的とし、活動をしております。

在学生に対しては「学生サークルへの寄付支援」「進路就職活動支援セミナーの共催」「卒業・修了記念品贈呈」を行っております。

その他にも、同窓生に対して行っている「同窓生への研究支援」「高知大学ホームカミングデーの共催」「大学からのお知らせ」の案内などがあります。「同窓生への研究支援」においては、「桜基金」を立ち上げ、同窓生の研究に対して研究費を支援したり、高知大学医学部看護学科で開催される講演や研修に共催することで同窓生へ参加のご案内をしております。

まだ、「桜基金」をご存じない方もいるかと思いますが、同窓生の研究活動等の支援をしていきたいと考えておりますのでぜひホームページや、新たに開設いたしましたフェイスブックもご覧にいただき、ご連絡を頂ければと思います。

また、今年度は同窓会10周年記念会合を開催させていただき、元学科長３名と現学会長、県内外から同窓生が参加してくださり、つつましくはありますが楽しい時間を過ごすことができました。今後も同窓生の横のつながりだけではなく、縦のつながりを強化できるように活動していきたいと思いますので、看護学同窓会の発展のために、今後とも高知大学教員の皆様をはじめ、同窓生、同窓会連合会の先輩方など多くの方からご支援を賜ります様、よろしくお願いします。

同窓生・在学生からのご意見お待ちしています。
同窓会HP：http://www.kango-doso.com
E-MAIL：kangodoso@kochi-u.ac.jp
Facebook：
https://www.facebook.com/kms.nurse/

Facebookでは、看護学科の行事を随時アップしていきますので「いいね！」をしていただければ幸いです。

同窓会10周年記念会合にて参加者の皆さんと

退任にあたって

分子細胞生物学教室教授　富永　明

1994年12月に熊本から赴任して22年が立ちました。高知医科大学が高知大学へと統合され、担当の大学院博士課程が医学系から黒潮圏海洋科学研究科（現在は黒潮圏総合科学専攻）と所属の変更はありましたが、医学部の生物系の講義の担当はずっと継続してきました。この間、皆様には大変お世話になりありがとうございました。医学部では生物学、生命現象の科学、遺伝学、医科生物科学、細胞分子生物学、医科生物学実習の他、免疫学、生化学を一部担当してきました。また、クラブ活動ではワンダーフォーゲル部の顧問を橋口教授から引き継いで担当してきました。

前任は熊本大学医学部免疫医学研究施設・遺伝発生医学研究施設で研究中心の生活を送っており、担当講義は少なかったのですが、学生時代の経験から講義内容が自分で実験したことのある人の説明でないと分かりにくいと実感していましたので、研究成果が得られた方法を学部教育にも反映させたいと思い努力してきました。研究面ではインターロイキン５(IL-5)を恒常的に発現するIL-5トランスジェニック(TG)マウスを熊本大学から動物実験施設に送ることから始めました。先に赴任されていた熊本大学で同僚だった是永先生にお世話になりました。今では遺伝子改変動物が多く飼育されていると思いますが、これが最初の遺伝子組換えマウスだったと記憶しています。現在は本学で作製された遺伝子改変動物も多いと思います。当時、施設外に出して実験するのは逃亡の危険があるということで、P2実験室を設けて施設内で実験ができるように決定されたことを記憶しています。これが現在の施設の2階の実験室です。

IL-5TGマウスで好酸球が選択的に増殖することから、その発生・分化・成熟，抗腫瘍活性等を研究してきました。また、血液細胞の発生を抑制し、神経細胞の発生を促進するホメオボックス蛋白質GOOSECOIDが血球分化に重要な役割を果たす転写因子ＰＵ.1に結合することによりRB(レチノブラストーマ)-ＰＵ.1の相互作用を阻害し、結果としてＰＵ.1を安定化することを報告しました。ＰＵ.1が安定化すると赤芽球の状態で増殖を続け、赤血球の成熟が認められません。　このことが、オーガナイザーで発現しているｇoosecoid遺伝子が血液細胞の発生を抑制する機構ではないかと論じました。

IL-5は細胞間コミュニケーション分子、サイトカインの仲間として知られています。細胞の社会も人の社会と似ています。人の社会では、握手・抱擁等の直接接触による方法と、手紙や声による間接的な伝達があります。細胞社会の場合、連絡手段としては細胞接着因子等を介する直接接触とサイトカインのような細胞から分泌される分子を介しての間接的なコミュニケーションがあります。大学の組織も高知医科大学から高知大学へ、私自身の対象も細胞間から大学間に変わりましたが、一貫しているのはネットワーク形成の仕事をしていることです。黒潮圏科学部門では黒潮流域圏の大学・研究機関とのネットワーク形成、国境を越えた教育の実施を目指して、毎年黒潮圏科学国際シンポジュウムを持ち回りで行ってきました。主に、高知大学，台湾高雄市の国立中山大学、フィリピンのビコール大学（ルソン島南部のレガスピ市に本部があり、タバコ市に水産学部・看護学部があります）とそれぞれ３回開催しました。2010年の高知大学から2015年の中山大学までの第4回から第9回大会では企画・運営に携わりました。特に、2013年にはインドネシアボルネオ島・西カリマンタン州ポンティアナク市のタンジュンプラ大学で開催しました。2014年は本学で、2015年は国立中山大学と国立東華大学と共催して高雄市・屏

東縣で、2016年はビコール大学と共催してタバコ市で開催されました。

40年間の研究生活を振り返ってみますと、最初は枯草菌の胞子形成において、環境が胞子形成という細胞分化にどのように影響を与えるかの解明をリボソーム蛋白質の変化の解析から目指しました。次にBリンパ球が抗体産生細胞になる際のTリンパ球からの分化・成熟因子であるサイトカイン、IL-5（当時の名前はT cell replacing factor）の研究とGOOSECOID-PU.1-RBの蛋白質間相互作用による分化調節の研究に従事しました。そして、最後に大学間ネットワーク形成の仕事をしたことから、人や細胞の違いはあっても、構成員間のコミュニケーションが細胞や人の社会のネットワーク形成に与える影響についての研究に携わってきたと考えています。

しかし、まだ人を育てることに関してはまだ道半ばと感じています。一昨年、国立中山大学、国立東華大学、フィリピン大学、ビコール大学、フィリピン農業省漁業水産資源局の協力のもと、台湾屏東縣の国立海洋生物博物館/国立東華大学海洋生物研究所（併設された施設でスタッフも兼任）で海洋保護区に関するCross-Border Educationをフィリピン、台湾、日本の学生で試みました。学生・教員・研究者を議論に参加させることの難しさを経験したところです。医学部での講義も、学生を如何に講義に参加させるかということが一番難しいと痛感しています。

今までの経験を振り返ってみますと、プラトンの友愛を議論した『リュシス』と徳を論じた『メノン』が教育に重要であると感じています。前者は美少年リュシスに対する友愛を話題にしていますが、ソクラテスの対話法を紹介したものです。この作品はソクラテスと若い友人ヒッポタレスおよび少年リュシスを登場人物としたプラトンの著した戯曲です。当時のギリシャ社会の青少年の集会が生き生きと描かれています。後者はテッタリアの若い貴族メノンに徳について聞かれたソクラテスが、メノンの召使いの少年から幾何学の法則を引き出すことによって、徳を例として教育とは元々持っているものを引き出すことだと示したものです。Niels Kaj Jerneは抗体の多様性は学習できるものではなく、もともと遺伝している多様性を生み出す仕組みによって生じると、『メノン』から着想したと記しています。このように、教育は学生の潜在能力を引き出すことだと思います。学生がプラトンの本を借りにきたときは感激しました。

ここに、皆様の協力で何とか高知医科大学、高知大学医学部での仕事を終えることが出来たと感謝しています。特に、台湾の大学との連携に関しては小林道也教授に大変お世話になりました。この機会をかりてお礼申し上げます。今しばらく、医学部の教育を担当することになりましたので、今後ともよろしくお願いいたします。

《新任教授紹介》

医学部生理学講座（統合生理学）教授就任のご挨拶

生理学講座（統合生理学）　教授　　山　口　正　洋

平成28年4月1日付けで生理学講座（統合生理学）教授を拝命いたしました。何卒宜しくお願い申し上げます。

私は嗅覚系をモデルとして脳神経系の研究に従事しております。ここに至るまでいろいろ変遷して参りましたので、まず自己紹介を兼ねてその経緯などご説明させていただきます。私は京都で生まれ２５年ほど太秦という映画の撮影所があった町で過ごしました。目の前は田んぼでしたが商店を営んでいた実家には昔はちょんまげ姿の役者さんが時々立ち寄っていたそうです（残念ながら私は覚えておりません）。京都大学医学部を卒業し、静岡で２年間内科医として働き、特に血液内科医として骨髄移植などに携わっておりました。そのまま血液内科の臨床医になるつもりでしたが、学位を取りに大学院に戻る際、先輩のお誘いを受けて基礎の研究室で研究することになりました。学生のころは研究者になることなど一瞬たりとも考えたことはなかったはずですが、基礎研究の面白さに始めて触れることとなりました。白血病細胞の分化誘導の仕事で学位を取得した後、ES細胞の血球分化の研究室に留学予定でしたが、相談に行った学内の先生がポスドクを募集していて分子生物学を一から教えてやるとの言葉に誘われて、留学を取り止めて国内でポスドク生活を送ることにしました。臨床と研究、両方できればよかったのですが自分には両立できる自信はなく、また当時は何かを捨てて犠牲を払わないとちゃんとした研究はできないという脅迫めいた考えが（少なくとも私の周りでは）一般的だったので、思い悩んだ末に人がやらないことをやりたいという甘い考えのもとに基礎研究の道を選びました。ポスドク先では血液と並行して神経の研究をやっていて、以前から神経には興味があったこともあって神経研究に足を踏み入れるきっかけになりました。神経変性疾患の原因遺伝子を導入したモデルマウスの仕事を行ううちに、骨髄移植の経験もあって自分の興味が移植医療など再生医療にあることに思い至り、神経再生に関わる仕事ができないものかと考えておりましたところ、ちょうど大人の脳でも新しい神経細胞が生まれているという現象が注目され始めており、神経細胞が生まれている嗅覚系を題材として神経新生の研究を始めることにしました。嗅覚神経回路の研究室に加わって、ご指導いただいた先生と共に理化学研究所脳科学総合研究センター、東京大学と移り、この度ご縁をいただいて本学で働かせていただくことになったというのがおおよその流れであります。

このような経緯で嗅覚系の研究をはじめた訳ですが、やってみると嗅覚は動物の情動や行動を直接に左右する感覚で、神経科学者の大きな課題である心の理解、行動選択の理解に結びつく非常に優れたモデル系であることが分かってきました。嗅覚に基づく情動研究にも携わることになり、当講座でも引き続き嗅覚系を題材として、神経の再生・可塑性と、情動・行動選択のメカニズムを２つの柱として、研究を進めていきたいと考えております。

このように、私は若いころから明確な目標を据えていたのではなく、その時々の興味によってその都度迷いながら進んできた者であります。幸い嗅覚系という非常にポテンシャルの高い題材に出会い、関わり始めて２０年近くになりますが、当講座の前任教授の椛秀人先生は嗅覚の面白さ、重要性にいち早く気付かれ独自の研究を開拓してこられた嗅覚研究のパイオニアであり、当講座は深い経験、蓄積のもとに嗅覚研究をリードしてきました。この伝統ある講座を引き継がせていただく有難いご縁に感謝申し上げるとともに、特段の先見性なくこの分野に入ってきたような私が今後どのように発展させていけるか試行錯誤の毎日であり、

皆様方には引き続きご指導ご鞭撻お願い申し上げる次第です。

当講座はこうありたいと考えるところをご紹介申し上げます。かつてはひたすら自分の研究に打ち込むことが美徳でありました。その重要性は否定しませんが、今や基礎研究と臨床の現場、社会との距離は格段に近くなり、研究は決して犠牲を払って孤独に取り組むものではなく、様々な立場の人が各々の視点を持ち寄って連携して進めるものになってきています。自分達の専門性が他の研究分野、医療、社会とどのように関われるかが今後の発展を運命づけるのだろうと思っております。嗅覚はどちらかと言えば人間にとってあまり重要な感覚ではないと思われてきましたが、近年嗅覚と感情・心の強い結びつき、嗅覚が我々の行動を意識下で左右する能力、神経変性疾患の初発症状としての嗅覚異常、食欲・食嗜好における嗅覚の重要性など、多様な領域との関連が注目されてきています。当講座は嗅覚研究を基軸として、様々な分野の方々との連携を模索していきたいと思います。異分野の連携はお互いの理解から始まるのだろうと思いますが、実際に連携を実現するには一層のモチベーションと努力が要求されることと存じます。面白そうなことを具体的な成果に結びつけることを目指して、様々な方々との相互理解からお願いしていければと考えております。

そうは言いましても、このような目的志向の方向性の一方で、研究そのものを面白いと感じることが研究の根本を支えております。臨床と基礎研究を二者択一のように思い悩んでいた時、基礎研究を将来こんなことに役立てたいと考えないではなかったですが、当時の私にはずいぶん遠く不確実なことのように思えました。それよりは、研究自体を面白く感じ、これまで誰も知らなかったことを自分の力で明らかにする喜びを味わいたい、という思いの方がより直接的で実感を伴う動機だったように思います。近頃はどうしても目的志向型の研究に誘導されがちですし、また医学部には人の健康・生命を担うという崇高な目的が厳然として存在します。そのような状況のなかで、特に若い医学部生には研究そのものの面白さを知ってほしいと切に願っており、若い時期にその種を植えることができるよう、常に意識しながら学生に接していきたいと考えております。当講座が担当しております生理学は生体の機能とその発現機構を学ぶ学問ですが、私達の体の恒常性や発達が如何に精妙に営まれているか、その美しさや感動を少しでも学生に伝えたいと思います。私のように若い頃には全く思いもしなかったことに年がいってから携わることもありますので（反面教師かも知れませんが）、種はいつ芽が出て実を結ぶか保証はないが種を失わずに持ち続けることの大切さを伝えられればと考えています。高知医科大学建学以来の本学の教育理念は「敬天愛人」と「真理の探究」であると承っております。このような時代であるからこそ、尚の事「真理の探究」に立ち返って、これを愚直に訴えつづけながら研究と教育に携わっていきたいと存じます。

こちらに参りましてほぼ1年経ちました。高知はもとより四国は初めて訪れる地であります。週末にはあちこち遊びに出かけたり、これまであまりよく知らなかった幕末や明治維新を勉強したりしております。晴天の桂浜で、こんなに広大できれいな青い海を見たのは初めてだと言って、それくらいで喜んでどうする、一度柏島に行って来いと半ばあきれられたりしています。高知に来る前は長く東京におりましたが、東京にあって高知にないものと同じように、東京にないものが高知にたくさんあることに日々気づかされています（一例ですが私は高知のUMJ村の徹底した戦略性に驚嘆し勝手に弟子入りしたつもりでおります）。同時に、日本の行く末が不透明な時代にあって、高知大学が高知県に対して、ひいては日本に対して大きなミッションを担っているということも段々と分かって参りました。折しも今年は大政奉還150年とのこと、幕末の志士に胸を張れるよう、大望を心のどこかに置きながら日々地道にまた精一杯取り組んでいく所存です。最後になりましたが、何も分からない私を親身になって様々に助けてくださっている先生方、職員の方々、また若い学生さん達に深く御礼申し上げます。これからもご指導ご鞭撻の程何卒宜しくお願い申し上げます。

病態情報診断学講座教授新任のご挨拶

高知大学医学部病態情報診断学講座　教授
検査部・輸血・細胞治療部　部長　松　村　敬　久

このたび、平成28年４月１日付けで、高知大学教育研究部医療学系臨床医学部門（医学部病態情報診断学講座）教授、附属病院検査部部長、および輸血・細胞治療部部長を拝命しました松村敬久と申します。私は、高知県出身で、土佐高校を経て（57期）、昭和63年に高知医科大学を卒業しました（５期）。同大学附属病院老年病科・循環器科に入局し、県内外勤務や国外留学（ロンドン大学セントジョージ病院循環器科）を含めて20年以上を内科・循環器科医師として勤務しましたが、私の専門が心エコー検査であるという縁もあり４年前から病態情報診断学講座に移動しました。その後、臨床検査専門医資格を取得し現在に至ります。

私どもの組織は、初代佐々木匡秀教授のもと世界初のベルトライン検体搬送システムを開発し大きく発展しました。第２代杉浦哲朗教授は病院長・医学部長を歴任され、最新の検体検査システムの導入と生体検査部門の大幅な拡充を行われました。ここで、簡単に講座・部門の人員をご紹介申し上げます。

講座（5名）
- 教授１　松村
- 准教授１　藤本　穣（大阪大医学部H5卒）
  平成29年1月1日～
- 助教１　上岡樹生（高知医大H3卒 8期生）
- 実験補佐員1
- 事務補佐員1
  （大学院生6）

検査部（51名）
- 部長１　松村
- 副部長２　小倉克巳技師長／医師は選考中
- 講師１　竹内啓晃（山口大保健学科　S59卒
  臨床検査技師（医学博士））
- 助教１　岡崎瑞穂（高知医大H14卒 19期生）
- 臨床検査技師42
- 受付事務員３
- 事務補佐員１

輸血・細胞治療部（7名）
- 部長１　松村
- 副部長（講師）１　今村　潤
  （高知医大S60卒 2期生）
- 臨床検査技師４
- 看護師１

講座ホームページ
http://www.kochi-ms.ac.jp/~fm_clncl/をご覧いただけましたら幸いです。

私どもの担当する臨床検査医学は、医療の根幹に関わる領域です。各専門医学が何本もの縦糸なら、臨床検査医学は　糸として交わり繋ぎ、横断的学問として発展しなければなりません。私は、循環器領域に固執せず、基礎・臨床医学講座の先生方と連携して、教育・研究・臨床を進めてまいります。

教育:基礎医学と臨床医学の中間に属する臨床検査医学は教育においても重要な位置を占めています。基礎医学で学んだ学問体系を臨床へ応用するための手段が臨床検査医学にはほとんど揃っています。臨床で役立つ検査医学を教育すべく、講座一丸となり医学生教育に当たります。また、大学院教育において、今後も多くの医学修士・博士を輩出してまいります。さらに、基幹施設として高知県で唯一の臨床検査専門医養成プログラムを作製し、臨床検査専門医育成にも力を尽くします。

研究：臨床検査はすべての医学領域と密接に連携しているため研究面でも幅広く活動することが

出来る分野です。講座内で行う研究だけでなく、基礎・臨床各講座と協力して幅広い分野に対応できる体制を整え、学術・研究水準を高め、多彩な研究結果を発信します。現在、腹部大動脈瘤の早期診断、慢性閉塞性肺疾患と心電図、下肢静脈血栓におけるエコーとD-ダイマーの意義、バンコマイシン効果の早期判定、急性冠症候群とピロリ菌による血小板活性化の関連性、肺癌発症におけるウィルスの関与、検査情報データベースの活用・データマイニング手法を用いた研究など、多方面で研究を進めています。さらに地域医療に密着した、社会から要請の高い研究課題あるいは萌芽的な研究課題を選定し、より効率的な研究の推進が行える組織づくりを計画していきます。輸血・細胞治療部では、治療用細胞の作製「細胞プロセッシング」および細胞治療、再生治療を推進し、先端医療の開発を視野に基礎・臨床研究を行います。

診療：皆様は、病院や健康診断の時に、血液や尿、心電図検査などを受けられたことがおありかもしれません。このようにして生体情報を調べることを臨床検査と言います。臨床検査領域の進歩は著しく、当検査部の全検査件数は平成27年度で420万件まで増加しています。検査部では検査部医師の管理・運営のもとで、医師と臨床検査技師が協調して、病気の診断・治療に欠かせない臨床検査を正確かつ迅速に実施しています。臨床検査結果は、「蛇口をひねれば出てくる水のようなもの」と考えられがちです。私ども検査部は国際規格ISO15189を取得し、この「水」の品質を一定基準に保つために機器の調整と試薬の劣化に注意して、測定誤差がないように気を配っています。輸血・細胞治療部は、附属病院内輸血・細胞治療委員会などを通して、適切な輸血療法のモデルを実践・提示しています。今後さらに、骨髄移植・末梢血幹細胞移植・血管新生療法などの「細胞治療」に関与していきます。

時代は移り、臨床検査は新専門医制度の基本領域の1つとなりました。若手医師を入局させ臨床検査専門医を育てなければなりません。第３代目の小生は、謙虚に努力を積み重ね、私どもの組織、医学部、および高知大学の発展に力を尽くします。総合的で精度の高い臨床に役立つ医療情報を如何にして取得するかを日々考え診療・研究を行います。また、当医学部の国家試験合格率上昇に寄与できる教育に努めます。甚だ微力ですが、患者さんと社会に貢献できるようその職責を全うする所存です。何卒一層の御指導と御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

病態情報診断学講座一同

泌尿器科学講座教授就任のご挨拶

泌尿器科学講座　教授　　井　上　啓　史

このたび、平成28年４月１日付けで、高知大学医学部泌尿器科学講座教授を拝命致しました井上啓史(いのうえけいじ)です。本誌面をお借りして、謹んでご挨拶を申し上げます。

私は生まれも育ちも高知市で、生粋の土佐っ子であります。当時、新設であった高知医科大学に６期生として入学し、平成元年に卒業後、藤田幸利初代教授が主宰される泌尿器科学教室に入局させて頂きました。大学院に入学後、当時大脇祐治前教授主宰の病理学講座において、降幡睦夫現教授のご指導の下、学位取得のみならず、腫瘍病理学や分子生物学を主とした研究の基礎を学ばせて頂きました。平成７年よりは、執印太郎第2代教授のご指導の下、高知大学医学部泌尿器科学教室にて、更なる臨床・研究の修練を積ませて頂き、平成９年よりは、米国テキサス州立大学MDアンダーソン癌センターに留学させて頂きました。同センターでは、癌生物学のIsaiah J Fidler教授および泌尿器科学のColin PN Dinney教授に師事し、腫瘍における血管新生メカニズムの解明および抗血管新生治療の開発というテーマで研究させて頂きました。帰国後は、この血管新生関連の研究テーマに加えて、光線力学に基づく新たな診断法や治療法の開発にも携わり、日本のみならず中東や欧州の研究者とも学術連携を組み共同研究に従事しております。臨床においては、より低侵襲な医療技術、特に泌尿器科腹腔鏡手術やロボット支援手術の臨床導入・実施に注力しております。

高知県は、全国より10年先行して人口が減少し高齢化が進んでおり、前立腺がんをはじめとする泌尿器がん、さらには排尿機能の問題など、われわれ泌尿器科医が担い解決すべき高齢者に特有の医療課題が山積しています。そこで、われわれは、高齢者にも安全に安心して受けて頂ける“真の低侵襲医療”を一日でも早く確立し、モデルケースとして全国へ還元することを目指したいと考えております。甚だ微力ですが、元気で優れた医療人を育成し、泌尿器科学を介して母校である高知大学の発展を目指して、故郷である高知は元より全国、さらには世界をも意識した教育・研究・診療に邁進していく所存です。今後ともになお一層のご指導ご鞭撻を賜りますようにお願い致します。

次世代医療創造センター教授就任のご挨拶

次世代医療創造センター教授　仲　哲治

私は、昨年４月に日本初の厚労省所管の創薬研究所である国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所　免疫シグナルプロジェクトシニアプロジェクトリーダーから、高知大学医学部に赴任致しました。

私のこれまでの研究歴と臨床歴を簡単に記しますと、1992年７月に大阪大学医学部第３内科（岸本忠三内科）入局し、免疫アレルギー内科の診療に携わりながら、サイトカインシグナル伝達の制御機構についての基礎研究を平行して始め、1997年にサイトカインシグナル伝達の負の制御分子SOCS-1（SSI-1）をはじめSOCS-2，SOCS-3などSOCSファミリー分子を単離し、遺伝子欠損マウスを作成して、その機能を明らかにして来ました。現在は、アデノウイルスベクターを用いた世界初のAdSOCS-1，AdSOCS-3を用いた悪性胸膜中皮腫や食道がん、頭頸部腫瘍など難治性がんに対する新規遺伝子治療法の開発を進めています。AMED革新がんプロジェクトの支援を受け、来年度中にがんセンター東病院にて医師主導治験を予定しています。

また、2006年に前職である医薬基盤・健康・栄養研究所に移籍してからは、大阪大学・慶応大学・京都大学・東京医科歯科大学のリウマチ内科・消化器内科と連携して、炎症性免疫疾患患者血清より新たな急性期たんぱく質LRGを同定し、新たな炎症性疾患のバイオマーカーとして開発しています。LRGは本年中に炎症性腸疾患の血清活動性マーカーとして保険的適応検査薬としてセキスイメディカル社から上市される予定です。さらに、食道がんや卵巣がんから新たにGPC-1，LSRなどのがん細胞膜特異抗原も同定しております。これらの抗原に対する抗体医薬品開発もAMEDの産学連携支援プロジェクトであるACTMの支援を受けて大手国内製薬企業とヒト化抗体の開発を進めています。

もう１つ大きな産学連携プロジェクトとして、免疫難病創薬開発に向けた慶応・阪大・高知大・基盤研・国内製薬企業の免疫難病創薬コンソーシアムの構築も進めております。現在、大型予算獲得のため契約・知財などの整備を進めています。

私の高知大学医学部でのミッションは、これら４つの創薬シーズの開発と免疫難病コンソーシアムの形成を進め、日本発・高知発の診断薬・治療薬を上市させ、高知大学オリジナルの臨床研究、医学研究を樹立することであると考えています。この結果は、研究・臨床環境において厳しい状況下にある地方大学の現状打破の１助になると考えています。

このミッションの達成のためには、がんや免疫の臨床拠点と連携を取り、患者情報と検体を基にした臨床から基礎へ、基礎から臨床への双方向性研究を行う必要があります。そのため、われわれは高知大学医学部附属病院において、臨床にも携わりながら、患者検体・情報（臨床）をベースとした創薬研究を進めて行きたく考えております。

高知大学の皆様方のご理解とご支援を頂けますと幸いです。

基礎看護学講座教授就任の挨拶と1年を終えて

基礎看護学講座　教授　　森　木　妙　子

平成28年４月１日付で基礎看護学講座の教授に就任した森木妙子でございます。就任後はや１年が過ぎました。実は看護学科で働かせていただいたスタートは、平成16年の４月になります。基礎看護学講座の助手として着任し、平成17年４月には臨床看護学講座の助教授・准教授として成人看護学にも関わらせていただきました。平成20年４月からは、高知大学医学部附属病院の病棟師長として現場の看護管理を、４年近く経験できる機会を得ました。臨床経験より教員経験の長い私でしたが、看護部や病棟スタッフの皆様方から、多大なご支援により何とか現場の管理を遂行しました。病棟責任者として、有益な看護サービスをめざす管理運営は大変興味深く、医療・看護の品質管理と、職員が働きやすい病棟の環境改善を目指しました。３交代制を２交代制に変更し、現任教育では精神看護の臨床研究を進め、看護の活性化を目指し、毎年全国学会発表や原著論文の投稿を継続しました。研究に要する時間も勤務時間として確保し仕事として位置づけ、倫理カンファレンスも軌道に乗るのに半年以上かかりましたが、どれもこれも『やらされ感』よりも、自分たちが『何のための仕事なのか納得して働こう』を信念に突き進む4年間でした。スタッフの専門性を表出し、スタッフの潜在する能力を引き出し現場力を強化することが自分の管理方針であり、それを貫きました。看護職のコスト意識を高めることにも強い関心がありましたので、看護の質で患者満足度を高める仕事が経営を好転させることをスタッフに伝え、折に触れ経営のことを説明し、結びつけて患者の看護を考えることを大事にしました。一緒に働いたスタッフの皆様は、本当に私の話に耳を傾け、ともに病棟管理を工夫してくれた仲間でした。看護管理のすばらしさをこの職場で教えていただいたと振り返ることができます。

基礎看護学講座では、基礎看護学と医療安全、そして養護教諭に関する教育、看護管理に関する教育を教員３名で担当しています。岡田久子先生（基礎看護学領域と養護教諭に関する領域）と下田真梨子先生（基礎看護学領域と看護管理学領域）の教育力とエネルギーは全開です。新年度は災害看護学が開講しましたので、さらに３名の教育力の創造と結集が求められます。仕事と健康のバランスをとりながら、３本の柱をしっかりと組んで、看護学科を支えていく所存です。

教員としてこれからの看護学生に期待することは、病院に入院している患者を支える看護職に留まらず、地域包括システムの流れに基づき、いつでも地域の生活者を支えられる看護職であることを願っています。そのために地域のことを知り、社会が看護に求めていることを自覚し、自己研鑽する力を蓄えていくことです。

高知大学では、全学部でディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーを策定しました。私たちが教育改革を推進し、看護学科教員の誰もが、ベクトルを同じくして学生を最終の到達地点に導けるポリシーとなっています。これからも大学教員として責任ある教育を行うには教育改革やFDの推進を継続し、なかでも管理職にある教授は、講座の運営だけでなく、領域を超えて他学部や外部施設とも協働していくマネジメント能力、交渉能力、経営能力、社会性の向上に努めることが必要であり、そのことを自覚して職務を遂行していく所存です。

臨床看護学講座教授就任のご挨拶

臨床看護学講座　教授　山　脇　京　子

平成28年４月１日付けで、初代藤田倫子教授、第２代高橋永子教授、に次いで第３第代目として、看護学部門臨床看護学講座成人看護学の教授を拝命しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。私は広島県の東部に生まれ、自然に囲まれ育ちました。高校卒業後は、岡山県で暮らし、７年間の臨床を経て、19年間教員を務めてまいりました。その間、高知医科大学の修士課程に入学し、２年間働きながら岡山から通学し、第１期生として卒業しました。その後、御縁があり、平成20年４月から高知大学医学部看護学科の講師として着任し、准教授を経て、今日に至っています。当初は、希望に燃え高知の地を踏みましたが、環境の変化が心身に及ぼす影響の大きさを身をもって体験しました。しかし、周囲の方々に支えられ、今日まで過ごすことが出来、10年が経過致しました。今では、住めば都というように、終の住処の選択肢の1つとなっています。

まず、成人看護学講座についてご紹介させて頂きます。成人看護学講座の教員は、講師、助教、私の３名です。着任当初は５人の教員でしたが、実践助産学の設置に伴い、実質４人で運営していました。しかし、今回の人事凍結により、３人となり、60％で運営しています。管理職の仕事は人、物、金とも言いますが、少ない資源の中で、モチベーションを維持し、どう疲弊を回避するか、試練の時と受け止めています。前途多難な中でスタートを切りましたが、止まない雨はないというように、早急な凍結の解除を期待し、厳しい事態を乗り切りたいと思っています。

成人看護学の教授内容には、成人期の発達段階の理解、保健統計、経過別看護、援助論としての系統別看護、がん看護学とターミナルケアとが含まれます。現在、専門看護師というスペシャリストが1,800人以上輩出されていますが、その中では、慢性疾患看護、急性・重症患者看護、がん看護が成人看護学領域に該当します。また、系統別看護では、呼吸器・循環器・消化器・内分泌代謝看護など、広範囲に及ぶ看護について教授しています。加えて、技術演習や臨地実習指導を行っています。看護は実践の科学とも言われていますが、カリキュラムの約1/3を臨地実習が占めています。このことは、看護学教育において、学生は単に知識として看護学を学習することに留まらず、学内で習得した理論や知識・技術を統合深化させ実際の対象に展開することが求められることを意味し、実習という授業形態による学習は看護学教育の最大の特徴となっています。

本学科の特徴の一つは、医学部に属していることだと思っています。そのため、授業においては、卓越した専門領域の先生方より、診断や治療を含む最新の医療について教授していただく事が出来ています。このことは、エビデンスに基づいた看護判断および看護を実践する上で、大変有用となっています。この場をお借りして感謝申し上げます。

また、臨床実習では、附属病院から学科の実習を最優先といった配慮や、臨床実習指導者をつけて頂き、充実した教育環境と体制のもとで実習を行うことが出来ることにより、教育効果が高まっています。本年度は、昨年度の約２倍の学生が附属病院に就職することが決まっています。今後も、多数の卒業生が附属病院に残って活躍してくれることを期待し、臨床と教育の連携を深めていきたいと思っています。

近年、人口構造の少子・高齢化が急速に進展し、地域を基盤とした「地域包括ケアシステム」へと進んでいます。このような状況の中、人を尊重する倫理的態度を身に付け、健康・医療と生活の両

方の視点を持った看護職には、これまで以上に多様な場での重要な役割を果すことが期待されています。

そこで、社会に貢献できる人材の育成のため、看護基礎教育にも責任ある教育が求められています。

先般、実習で受け持った患者様から学生にお手紙が届きました。それには、学生の作成した食事に関するポスターを退院後に見ることで、「〇〇さんに食べちゃいかんきといわれるようで」と食事療法を継続することができ、体重が減少し、データも改善したという内容に感謝の言葉が添えられていました。退院後の生活を見据えた、個別的な援助関係がなす成果と思います。患者様に寄り添い、関わることで、自立という成長に導く看護独自の機能を看護基礎教育で学んでほしいと思っています。また、人を大切にできる心を持った人材を育成したいと思っています。人を大切にできる心は、命、その人の今までとこれらからの生活も大切にでき、その人らしい生き方の支援ができると信じています。このような看護の根幹となる豊な心の醸成は、看護の質を高め、人々の幸福へつながると思っています。

最後に、昨年の４月にお祝いに頂いた胡蝶蘭に花芽が付きました。花言葉は「幸せが飛んでくる」です。花を育てることも好きですが、100年を見据えて人を育てていきたいと思っています。本学科は開学19年を迎え、多くの卒業生が巣立っていきました。ホームカミングデーの時の写真を載せさせて頂きましたが、卒業生が帰って来たいと思える大学であるよう、高知大学看護学科の発展のために精進してまいりたいと思っています。何卒ご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

ホームカミングデイ

《防災訓練の実施について》

平成28年度看護学科防災訓練を実施して

学部災害対策室協働WG委員長　森　木　妙　子

平成28年11月27日に高知大学防災推進センターシンポジウムが開催されました。そのとき脇口学長がおっしゃられた挨拶がずっと気になっています。その挨拶とは、「知識や情報は体験を伴って始めて役に立つ。体験のかわりに繰り返し訓練をしなければならない。どう考え、どう動き復興していくのかの『楯』にして欲しい」でした。

本年度看護学科の防災訓練では、避難時の初動体制に視点を置き平成24年度から実施している防災訓練のフロー図や対応策を見直し、本WG６回を開催し議論を進めプレ訓練を実施した。その結果として看護学科防災マニュアルのバージョンアップを行うとともに、看護学科教員の初動体制と学生の避難方法について方向性を見出すことができ、新たなマニュアルとして『避難シート』を作成した。この『防災マニュアル』と『避難シート（別添）』を看護学科棟の全室に掲示し、平成28年度の防災訓練を以下のとおり実施した。

1）日時：平成28年10月27日（木）16：20～17：00

『16時20分に土佐湾沖で巨大地震が発生し、60秒の揺れがあり60分後に医学部に津波到着』を想定し実施した。

2）参加者：看護学科学生、看護学科教員、学生課職員

3）目的：『新たな看護学科防災マニュアル』と『災害発生時の避難について』を避難訓練に活かすとともに、訓練後に初動体制と防災マニュアルについて再度改善を図る。

4）今後の予定：４月のオリエンテーションで「初動体制」と「避難シート」について、学生に周知を図る。

本年度の防災訓練を総括すると初動体制の組織化が行われ、基本ベースの避難については方向性を見出すことができた。しかしながら本部機能の動きが追いついていないため、ソフト面の強化が早急に必要であることが判明した。また、講義や演習、学生部会、防災訓練でともに活動して感じることは、災害時に支援しようとする姿勢とその能力を常に培っていることです。

今後は、看護学科と医学科との合同での防災訓練の実施に向け、医学部の行事として取り組んでいきたいと思っております。

平成28年10月27日（木）に実施した看護学科防災訓練

看護　１階-●●室

【基本】災害が発生し避難する際は、最後の避難者がこの用紙を剥がして避難してください。

災害発生時の避難について

1. 身の安全の確保・・・揺れの場合は身を低く

☆揺れている間は、身を低くして動かない。静かに、安全確保。
☆避難指示ですぐに動けるように、準備（携帯品は最小ー財布・スマホ・鍵程度）

2. 情報の収集・・・ドアをあけ周囲の状況を確認する

☆ドアを開け周囲の状況を確認し、安全な避難経路を確認する。

3. 避難・・・安全な経路でドアを開けたまま図書館前へ

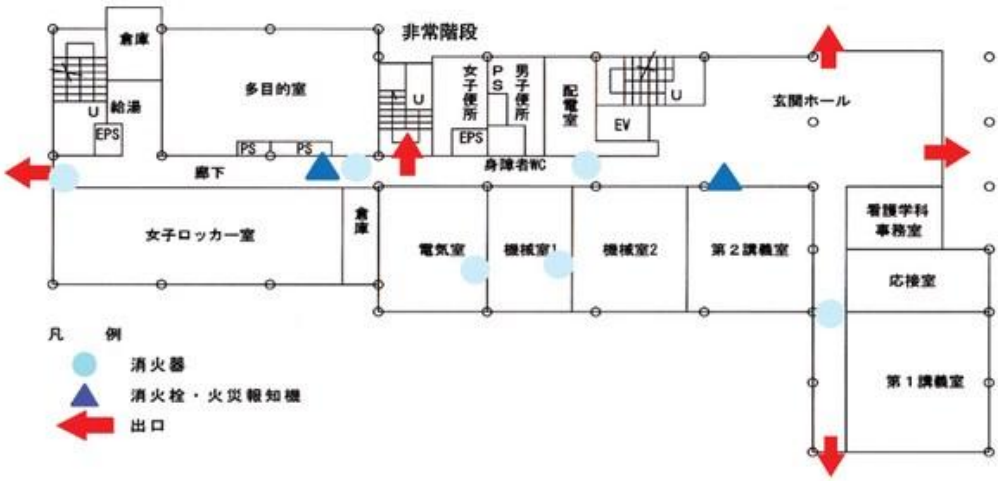
☆地震時・・・階段は急な揺れに備えながら、慌てず降りる。
☆火災時・・・非常階段を使用。
☆要援護者を発見し、一緒に避難することが難しい場合はひとまず図書館前の避難場所に向かい応援を呼ぶ。

※落ち着いて行動してください
【防火扉】閉じ込められた時は手動で脱出できます
【自動ドア】停電時は手動で開きます

4. 報告＆連絡・・・最初に到着した者を目印に集まり報告後はしゃがんで待機

☆教職員に看護学科棟内のどの部屋から何名で避難してきたかを集約担当に報告する。
☆図書館前での待機が困難な際は、教職員が誘導を行う。
☆要援護者を発見し、応援が必要な時は、教職員に報告する。

閉じ込められた場合の連絡先：学生課　088-880-2786／2258（内線：22401／22411）



持参者名	自力で避難できない者（　　人）
教員・職員・学生	

「本訓練の企画・実施に当たっては、防災対策検討専門部会、防災推進センター災害医療分野も協力しています。」

《学生の活動》

WJEMA（West Japan ESS Medical Association）主催スピーチ大会 2015,2016年優勝

～自分を伝えるということ～

医学科2年　ESS副部長兼スピーチチーフ　間　崎　　護

このたびはWJEMA（West Japan ESS Medical Association）主催スピーチ大会で2015,2016年に優勝したことで、このように筆をとる機会を与えていただき非常に感謝しています。せっかくの機会ですのでここでは、私が英語のスピーチを続けてきたことで感じたことをお伝えさせていただきます。

もともと私は人前で何かを話すことが好きではありませんでした。中学校の発表の授業では必ず同じ班員の後ろに隠れていて、早く時間が過ぎ去ってくれることばかり願っていました。それでも複数人で1つの発表をするときはまだマシでした。一人きりで発表などするとなったときにはもう、それはそれは辛いものでした。自分がたいしてしたくない発表を、あまり聞きたそうにもしていないクラスの聴衆の前でするのがたまらなく嫌だったのです。まるで自分がクラスのだれにも受け入れられていないような気がしました。しかし中学生のあるとき、偶然（全生徒が強制参加の）英語の暗誦大会でクラス一位になってしまいました。それでも当時の私は全くうれしくありませんでした。なぜならクラス1位には暗誦の校内大会に出る義務が課せられていたからです。そして恥をかきたくないということで、いやいや練習をして臨みました。ところがそこで僕の価値観は180度転換することとなります。クラスでの暗誦大会は全員強制参加でしたので、暗誦したい人、したくない人、全員が聴衆でした。しかし、校内の暗誦大会は傍聴自由でした。そのため、聴衆は学校の英語の先生や、英語好きで英語の暗誦を聞きたい人たちがたくさん集まっていたのです。これは話者にとっては大きな違いです。いかにいやいや聞く聴衆に無理やり自分の話を聞かせることがつらいことなのか、いかに自分の話を受け入れてくれる人に話を聞いてもらうことが楽しいことか、ということをこのとき、私は初めて知りました。そして、一応の練習の成果もあってか、何とか校内でも優勝することができました。校内優勝の者は県下の暗誦大会に出場する権利が与えられます。以前の私ならこの権利を義務と感じ、放棄したい気持ちでいっぱいだったでしょう。しかし、一度聴衆に受け入れられる喜びを知った私はその権利を捨てることなどできませんでした。そして順調に県下の暗誦大会でも無事、優勝することができました。ここから私の人生は変わりました。それ以前、人に何かを表立って伝えることに感じていた不安感や嫌悪感がすっと消え、他人に自分の思いを伝えることを楽しいと感じるようになりました。もちろん、自分の伝えることすべて世の中に受け入れられることなんてないでしょう。むしろそうやって積極的に伝えようとする人は世の中から受け入れられない、ということの方が多いかもしれません。でもそれでいいんだと、私は思っています。大事なことは受け入れられるまであきらめないことだと思っています。自分が受け入れられない理由、理解してもらうためにはどうすればいいか、を一生懸命に考えることで自分も成長できるはずです。大学生の大半は、中高一貫校でとりあえず高校まで行くか、何となく周りのみんなが高校受験するから高校に行って、そこでふたたび大学受験をうけるのが一般的だから志望校をきめて頑張って大学受験して大学に入ってきたという人ばかりです。私も当然その大半の大学生の中の一人です。しかし私は決してそういう今までの行き方を批判したいのではありません。むしろ自分が将来、何になりたいか明確な夢とそれに向かっていくビジョン

が見据えられていて、その第一歩としてこの大学に来たんだ！という人はごく少数ではないしょうか。ほとんどの人は、将来は～系の仕事につきたいな、とぼんやりと考えてはいるけれど、具体的にはどこの職場で何をしていきたいか、は大学にいるうちに考えるという場合が多いと思います。しかし社会に出て、働き出せば、皆が個性を培い、それを発揮しながら生き残っていかなければなりません。自分を他人に伝えるというのは勇気のいることです。自分がもしかしたら相手にされないかもしれない、それどころか拒絶すらされてしまうかもしれない。そんな不安や恐怖を乗り越えなければなりません。でも他人に受け入れてもらえたときの喜びもひとしおです。決して自分の殻にこもってばかりいない、同僚にも患者さんにも受け入れてもらって医業に携わっていけるような、そんな医師になれるよう精進してまいります。ご愛読ありがとうございました。

スピーチ大会の授賞式にて

ワシントンD.Cで開催された第3回デフバレー（聴覚障がい者バレーボール）
世界選手権に日本代表として出場

デフバレーボール日本代表チーム主将として世界選手権に出場!

医学科6年生　狩　野　拓　也

高知大学医学科６年の狩野拓也です。私は、聴覚障害者によるバレーボール（デフバレー）の日本代表選手に選ばれ、2016年７月にアメリカで開催された世界選手権に日本代表チームの主将として出場いたしました。想定以上の外国選手の体格の違いやパワーを感じながらもサイドアタッカーとして、出場８カ国中６位の成績を収めることができました。この結果を受け2017年にトルコで行われるデフリンピック※の出場が検討されているところです。

デフバレーは、聴覚障害者によるバレーボール競技で健常者の６人制バレーボールとルールやコートの広さは同じでありますが、試合中は補聴器の着用が認められず、チームメイトの声、審判の笛の音、ボールをはじく音などが聞こえない中でプレーが行われます。

生まれつき聴覚が弱く補聴器をつけている私は、バレーボール部だったいとこの影響で中学生の時にバレーボールを始めました。中学、高校、大学とレギュラーで活躍してきましたが、大学入学当初は、ゴルフ部にも所属し、バレーボール一筋ではなかったところ、２年前にデフバレーと出合い、合宿や大会を通じて全国の同年代の難聴者との繋がりができたことによるものです。デフバレーは、静寂のコートで行われるため、連携プレーの難しさ、選手同士やスタッフとのコミュニケーションの大切さを実感し、楽しさや喜びを分かち合うことでチームメイトとのきずなが深まりました。また、デフバレーに取組む中で、バレーボールに対する意識にも変化があり、日々の練習にも力が入ったことで、高知県の国体チームの主力選手にも選ばれました。

バレーボールに打ち込む一方、現在、放射線科医を目指し、国家試験に向けて勉学に励んでおります。「中学３年の時、骨折を治療してくれた医師の優しさに触れ、弱っている人を助けることのできる医師を志したいと思い始めました。」

年間６回程行われるデフバレーの合宿のほか、医学部や国体チームの練習に参加する中、「デフバレーに参加したことで世界中の人や難聴者と出会えたことは、私にとって大変プラスとなりました。」

※他の障害に比べて身体能力への影響が少ないなどの理由によりパラリンピックへの参加が認められていないため、聴覚障害者の世界規模のスポーツ大会として、国際ろう者スポーツ委員会が独自に４年毎のデフリンピックを開催している。

学内にて

デフバレー国際試合　試合前国歌斉唱（左端）

＜学生関係行事＞　平成28年４月～平成29年３月

開　催　月　日	行　　事　　名	備考(開催場所等)
４月３日	入学式	高知県民文化ホール
４月３日	後援会総会	三翠園
４月４日	新入生オリエンテーション	臨床講義棟
４月５日	医学科1年生とアドバイザー教員との懇談会	学生食堂
４月６日	看護学科1年生とアドバイザー教員との懇談会	学生食堂
４月７日	医学科６年生とアドバイザー教員との懇談会	学生食堂
４月８日	白衣授与式	臨床講義棟
４月８日	医学科５年生とアドバイザー教員との懇談会	学生食堂
４月９日・10日	医学部新入生合宿研修	国立室戸青少年自然の家
４月12日	高知県医師養成奨学金貸付制度説明会	講義棟
４月21日	看護学科３年生とアドバイザー教員との懇談会	学生食堂
４月25日・26日	医学部長と地域枠学生との懇談会	医学部長室
４月26日	医学科３年生とアドバイザー教員との懇談会	学生食堂
６月２日	第１回関連教育病院運営協議会	特別会議室
６月５日	ＡＯ入試説明会	実習棟
６月25日	第1回大学院説明会	看護学科棟
７月17日	advanced ＯＳＣＥ（医学科６年生）	医学部附属病院
７月20日	第68回西日本医科学生総合体育大会壮行会	講義棟
８月６日～21日	第68回西日本医科学生総合体育大会（西医体）	徳島大学主管
８月７日	オープンキャンパス	実習棟
８月10日・11日	よさこい祭り「醫(くすし)」	高知市内演舞場他
10月18日	第１回後援会理事会	ザ クラウンパレス新阪急高知
10月８日・９日	第36回南風祭	岡豊キャンパス
10月25日	合同慰霊祭	医学部体育館
10月27日	学生・教職員対象防災訓練	図書館前広場他
10月30日	ホームカミングデー	岡豊・朝倉キャンパス
11月12日	リーダーシップセミナー	看護学科棟
11月26日	第２回大学院説明会	看護学科棟
11月23日	南国警察署と協働の防災訓練	運動場
12月18日	ＯＳＣＥ試験（医学科４年生）	医学部附属病院他
１月５日	ＣＢＴ試験（医学科４年生）	看護学科棟
１月14日・15日	大学入試センター試験	岡豊・朝倉キャンパス
２月11日～13日	医師国家試験	高松市
２月16日	助産師国家試験（大学院生）	高松市
２月17日	保健師国家試験	高松市
２月19日	看護師国家試験	高松市
２月25日・26日	前期日程入学試験	岡豊・朝倉キャンパス
３月17日	医師国家試験合格発表	
３月23日	卒業式	高知県民文化ホール
３月23日	医学部学位記授与式	体育館（岡豊キャンパス）
３月26日	第２回後援会理事会	特別会議室
３月27日	看護師・保健師・助産師国家試験合格発表	
３月29日	第２回関連教育病院運営協議会	特別会議室

よさこい祭り醫医学部チーム

よさこい祭り医学部チーム

▲防災訓練

▲防災訓練

▲防災訓練

▲医学科国試見送り

“Summer Medical Education Institute”に参加して

医学科5年生　高　橋　佐和子

夏休みを利用して、ハワイ大学医学部でのWS “Summer Medical Education Institute”に参加しました。入学時からずっと参加したいとおもっていたので、夢のようでした。

プログラムでは、レクチャー、PBL、身体診察やinjectionの実習、模擬患者診察、マネキン・シミュレーター実習などを行いました。中でも、模擬患者実習では、模擬患者さんと一対一で医療面接や身体診察をさせていただき、実際の場面をよりリアルに体験する事が出来、嬉しかったです。

私は留学経験がなく、長期間英語漬けという状況になるのは初めてだったため、最初は自分の英語がちゃんと通じるのか、生の英語が理解できるのか不安でしたが、毎日たくさん英語を使うため、日を追うごとに上達したように感じました。実習までに詰め込んだ英単語が役に立つ喜びを感じるとともに、日本の他大学の学生の意識の高さや語彙力には驚きました。将来に対するモチベーションや頑張っていることなど、考えを共有することができ、良い刺激になりました。

また、今年は高知大学からの参加学生が私だけだったため、ルームシェアシステムを利用しました。Kori-joさんがルームシェアを希望している学生の連絡先を教えて下さり、自分たちでホテルの予約、部屋割り等を行いました。最初は不安でしたが、みんな一緒なので心強く、毎朝一緒に登校したり、実習後に遊んだりととても仲良くなれてよかったです。

実習が終わると、海や山に遊びに行ったり、美味しいものを食べにいったり、ハワイのレジャーもたくさん楽しむことができました。最終日に用意してくださったfarewell partyでは、感謝の気持ちとさびしい気持ちがあふれて泣いてしまいました。

ハワイ大学の学生や先生方の丁寧なご指導のもと、大変充実した実習となりました。また、実習で仲良くなった他大学やハワイ大学の友達のおかげで、最初から最後まで楽しく過ごすことができました。

１週間という短い期間ではありましたが、将来につながる貴重な経験ができました。応募から実習終了までお世話になった皆様に心から感謝しています。本当に有難うございました。

実習中の写真を添付させていただきます。

台湾大学派遣プログラムレポート

看護学科3生　竹　﨑　　愛

今回の研修は私にとって、台湾の医療・看護、福祉に実際に見て、体験するだけでなく、現地の学生との交流を通してお互いの経験や考えを共有し、学ぶことのできた、貴重な経験となった。

印象的であったことのひとつは、訪問看護である。訪問させていただいた家ではベッド上の入浴介助をさせていただいた。私は以前にも、在宅実習で訪問入浴に立ち会ったことがある。その際療養者は、訪問入浴という訪問看護とは別のフォーマルサービスを利用して入浴をしていた。正直、日本の訪問入浴の方が機械も新しく、効率もよい。

しかし、日本の訪問入浴は利用費が高く、利用できない人もいる。その一方で、台湾では訪問看護自体が無料であり、看護師が療養者家族から受け取っていたお金もあまり高額ではなく、そのお金も地域に何割かフィードバックするとのことだった。また、一般的な手術についても無料と聞き、台湾の福祉体制に驚いた。高齢社会である日本では実現困難だが、誰でも医療を受けやすい体制だと思う。しかし、近年台湾も高齢化社会となりこの体制はあまりよくないと台湾の学生、先生も話しており高齢社会における医療費の問題は日本も台湾も同様にあることを感じた。また、他の学生が訪問した家は、ごみに囲まれて人が暮らしていることを疑うような家であった。あまり、日本ではこのような家を見たことがない。台湾ではこのように貧富の差や衛生状態が十分に整っていない場所もあるが、訪問看護で同じようにケアが提供されていることで地域住民の健康が守られていることを学んだ。

フィジカルイグザミネーションの授業では、3年生の授業に参加した。6人程度の生徒に1人の先生が付き、模擬の診察室のような部屋で、触診や打診の授業を行っていた。生徒も積極的に発言しており、学習したことが身につきやすい授業だと思った。また、多くの学生が英語を話せるため、就職後に外国人患者へ対応や国際的にも活躍できるのではないかと思った。一方でオペ室見学においては、日本ではもう行っていない、ブラシを使っての手洗いをしており、台湾と日本の医療の差を感じる場面もあった。私たちは台湾も地震の起こる国であるため、災害看護は大切なのではないかと考え、最終日に災害看護をテーマにプレゼンテーションを行った。その際私が驚いたのは、現地学生も必要性を感じているものの、災害看護は必修科目ではないということだ。さらに実習においても、日本では患者に注射はできないが、台湾では指導の下実施できると聞き、同じ医学部でも教育に違いを感じた。このように、驚きも様々あったが、他国の同じ職種を目指す仲間と情報や学びを共有できて楽しかった。来年台湾大学の学生が来る際にまた彼らに会えるのが楽しみである。

今回の経験を通して、今後日々行う看護に活かし、日本だけでなく国際看護についても目を向けていきたい。

第63回よさこい祭り　醫ーKUSUSHIー

くすし代表　医学科3年生　菅　原　拓　真

高知の夏といえば、やっぱり「よさこい祭り」。毎年８月９日から12日は全国から約200チーム、合計18,000人もの踊り子が集まって高知市内を賑わせます。私たち「高知大学医学部よさこいチーム醫―KUSUSHI―」も、８月10日と11日のよさこい祭り本祭に出場し、地域の方々と一緒に高知市内を踊り回り、南国土佐の暑い夏の日を楽しみます。

我々の出場は2016年に開催された「第63回よさこい祭り」で通算36回目を迎えました。醫の歴史は、高知大学医学部の前身である高知医科大学の時代からコツコツと築き、たくさんの方々の支援を受けて育てられてきましたが、我々が自ら誇っているのはこの“単なる数字”の歴史だけではありません。醫が自ら本当に誇りに感じていること、それは、「毎年すべてを学生が一から作り上げている」ことです。今回の寄稿では「醫のよさこい」がどのようにできるのか、その作製ストーリーを少しのぞいてみましょう。

毎年12月になると、楽しい（？）クリスマスを目の前に新幹部が発足し、次の年度の演舞テーマを掲げることからお仕事が始まります。テーマと共にイメージカラーや音楽のジャンルを決め、衣装や地方車のデザインといった、その後の作業に統一感を持たせます。テーマとイメージカラー、音楽のジャンルが決定すると、それぞれの分野で輝く学生アーティスト達がそれらにちなんだ衣装デザインと音楽を考えます。音楽、衣装に合わせた振り付けは、当チーム自慢の振付師が学生の若さ、力強さ、そして優雅さを表現し、お客さんの心を魅了します。さらに毎年趣向を凝らして作りあげる地方車は、踊り子たちのよさこい魂を駆り立て、素晴らしい夏を演出します。

このように、音楽、衣装、地方車、踊り、、、

それぞれの作品が一つの大きな芸術作品に仕上がり、
よさこい祭りを迎えるのです。
　さあ、みなさんもご一緒に！
　よっちょれよ、よっちょれよ、よっちょれよっ
ちょれよっちょれよ♪

2016年のテーマ：「登龍門」
イメージカラー：黒、赤、金

フェスタ 国立大学2016

第36回　南風祭を終えて

南風祭実行委員会委員長　医学科2年生　川　瀬　博　也

第36回南風祭の実行委員長を務めさせていただいた、医学科２年川瀬博也です。高知大学岡豊キャンパスが一番盛り上がるといって良い高知大学医学部最大級のイベント、南風祭。そんな大イベントの実行委員長を引き受けたときは、楽しみな気持ちでいっぱいでした。そこに、前委員長から仕事の内容や心構えを聞き、少しの不安とともに責任感も芽生え始めました。そして、自分が南風祭の委員長なんだという自覚をしっかり持っていかなければいけないと思いました。

実行委員としての最初の仕事はテーマを決めることでした。簡単だと思っていましたがやってみると難しく、とても苦労しました。テーマはその年の学祭そのものを表していると言って良いので、真面目すぎるものではなくユーモアも必要ではないか、と言って、テーマを通して伝えたいことを見失うことはあってはならない。など、実行委員全員で試行錯誤しました。その結果「南風大作戦2016 医大をリオより盛り上げな祭」に決定しました。このテーマには、2016年の８月にオリンピックが開催されたブラジルのリオデジャネイロよりも岡豊のキャンパスを盛り上げようという、話題のキーワードをつかった文字通りのシンプルなメッセージを込め、この学祭がこの１年で何よりも楽しかったと思ってほしいと願って決定しました。

そして、全部署で学祭に向けての準備がスタートしてからは、広告取りに明け暮れる毎日でした。２年生が中心になり、様々な企業にパンフレットへの広告記載のお願いに回りましたが、たくさんの人と触れ合い、快く応じてくれ「頑張って」と励ましてくれる方々に、感謝の気持ちと、人との繋がりの大切さを感じました。これは、広告取りだけではなく、花火に向けた募金活動や、病院や地域の方々へ南風祭開催のお知らせに行った時にも感じました。先輩方や教授の方々だけでなく、地域の方々にも励ましの言葉をいただき、実行委員間の協同はもちろんのこと、先生や学生・地域

のみなさんなど、沢山の人との繋がりを大切にしないとこの学祭は成功しないと、改めて気持ちを一つにする事ができました。日がたつにつれ、大変だと思う気持ちよりも、連帯感が生まれ、学祭を接待に盛り上げあて成功させようという気持ちが増してきました。学祭に参加するだけでは味わえなかった、仲間と協力して作り上げていく過程を経験でき、自分自身も成長する事ができたと思います。学祭に至るまでも、いくつか問題が生じてしまいましたが、それをみんなで乗り越えたことで成長の糧になり、また、企業の方々、学務の方々、先輩などに助言をいただきながら無事学祭を迎えることができました。

南風祭当日、午前中は予報通り雨でした。以前から雨の場合のスケジュールを幹部と確認していましたが、せっかく自分たちが準備してきたんだから少しの雨なら予定を変更せずにやりきろうという結論に至っていたこともあり、雨も大降りにならなかったため、予定通り開催することができました。１日目の午後と２日目は天気にも恵まれ、２日目の夜の花火まではあっという間に時間が過ぎました。しかし、集大成の花火の打ち上げが強風により困難であるというアクシデントに見舞われ、花火前の体育館での委員長としての最後のあいさつも達成感はまだ感じることができませんでした。最後には、消防署の方々の協力もあって無事花火を打ち上げることができ、例年よりも達成感であふれた締めくくりをできたと思っています。

南風祭が終わり、振り返ってみると、パンフレットに広告を掲載してくださった企業や病院の方々、音響を担当してくださったキャラバンサライさん、ステージ設営をしてくださったカイト興業さん、そして電気関係を担当してくださり様々な助言もくださった四国電飾工芸さんには、こちらの手違いでご迷惑をおかけしたものの最後までお世話になりました。また、花火募金してくださったみなさん、学生のわがままを聞いてくださった大学関係者の方々、学祭に関わって手助けしてくださった先輩や後輩、同級生のみんな、このように様々な方に支えられて南風祭の委員長を務めることができました。この場を借りて改めてお礼申し上げます。委員長の最後の仕事は、来年度の南風祭がより良いものになるよう後輩に伝えていくことだと思っています。どうぞ、来年度以降の南風祭もよろしくお願いします。

＜課外活動紹介＞

高知大学医学部サッカー部　～西医体を終えて～

医学科3年生　小　林　海　里
（医学部サッカー部主将）

私たち高知大学医学部サッカー部は、プレイヤーとマネージャーを合わせて計50名の部員が在籍しています。一昔前までは部員の数は少なく、試合をするのがやっとという感じでした。しかし世界中でサッカーの人気が高まってきていることもあり、ここ数年は毎年たくさんの部員が新たに入部しています。プレイヤーだけでなくマネージャーもかなりの人数が所属していて、女性にとっても人気のある部活になっています。これもなでしこJAPANがワールドカップで優勝した影響がかなりあるのではないかと個人的には思っています(笑)。

部員の多くはサッカーの経験者ですが、中には大学からサッカーを始めた初心者もいます。主な活動は普段の練習や、他大学との練習試合や定期戦、県リーグや大会への出場、さらには社会人チームや高校生と練習試合などをすることもあります。練習は基本的には火・木・土の週に３回、２時間ずつやっていて、日曜日は練習試合や公式戦などがあります。練習は基本的には学校のグラウンドで行っています。冬期は日没が早く学校にナイター設備がないため、近くの学校やスポーツ施設のグラウンドを借りて練習しています。

高知大学医学部サッカー部が参加している大会は１年間に３つで、４月の四国大会、６月の中国四国大会、そして８月の西日本医科学生総合体育大会(通称：西医体)です。春から夏にかけて大会が集中しているため、秋・冬は休みかというと決してそうではなく、各大学はこの３つの大会でいい成績を残すため、秋・冬に走り込みや基礎的な練習などを行っています。そのため、この時期の過ごし方で大会の結果が変わると言っても過言ではありません。

平成28年度の成績は四国大会:優勝、中国四国大会：３位、西医体：優勝というほとんど完璧と言っていいほどの好成績を残すことが出来ました。この成績だけ見ると、常に優勝候補となるようなチームであるかのように思われるかもしれませんが、私たちサッカー部は決して常に勝ち続けてきた常勝軍団ではなく、ここ何年かは１回戦を突破することすら出来ないチームでした。優勝はおろか今の６年生ですら西医体で勝ったことがあるのは１回だけで、もちろん３年生の私は一度もありませんでした。毎年ＯＢの方々に期待していただきながらも思うような成績を残すことが出来ず、メン

バーの能力が低いわけではないのに勝てない、というもどかしさを感じていました。平成27年度の中国四国大会では優勝することが出来たものの、西医体では１回戦敗退でしかもそのスコアは０－５の惨敗でした。練習試合や四国大会・中国四国大会では勝つことは出来ても、医学部サッカーにとって最大の大会ともいえる西医体では勝つことが出来ていませんでした。

ではなぜ今年のチームが前述のような好成績を残すことが出来たのか。その最大の理由は明確な目標設定と、チームの一体感にあったと個人的には思っています。

去年の西医体で０－５の惨敗後、チームは前キャプテン中山(医学科４年)を中心に新チームをスタートさせました。まず、チームの目指すべき方向を共有するために「西医体で1勝すること」そして「卒業生に良い思いをさせる」という今までよりも具体的な目標を２つ掲げました。それからはその２つの目標を達成するべく日々練習を重ねていきました。個人的にも昨年は副キャプテンを務めさせていただき、キャプテンを補佐しながらもチームの目標達成に向かって必要なことを考え実行してきました。練習から互いに切磋琢磨し、お互いを高めあう事でチームの底上げにもつながり、全体としてのチーム力もどんどんと上がっていきました。試合になれば出場している11人だけでなく、ベンチメンバーやメンバー外のプレイヤー、さらにはマネージャーまで全員が１つになって勝つために戦いました。このような１つ１つの勝利を全員で掴みにいくという姿勢が実を結び、目標であった西医体初戦突破を達成することが出来ました。そして勢いに乗った私たちは１戦必勝で戦い続け、ついには西医体優勝という最高の結果を得ることが出来ました。更には全国大会にも出場し、準優勝という成績をおさめ、非常に貴重な経験をすることが出来ました。

サッカー界にはこんな名言があります。

“サッカーは強いものが勝つのではない。勝ったものが強いのだ”（元ドイツ代表キャプテン、ベッケンバウアー）

今年の西医体で優勝した後、私はこの言葉の意味を初めて実感することが出来ました。

私たちは昨年まで何も勝ち取っていないにも拘わらず、どこかで「自分たちは強いから普通にやれば勝てる」という根拠のない自信を持っていました。能力は確かに低いわけではないのに公式戦では勝つことが出来なかったのはそういった気持ちの部分に少なからず原因があったのかもしれません。しかしながら私たちは今年の西医体で優勝して、初めて本物の勝者になることが出来ました。

西医体を終え、サッカー部は新たな幹部のもと新チームをスタートさせました。私はキャプテンとして今シーズンの目標を、あえて「西医体で１勝する」というものに決めました。西医体で優勝したと言っても、私たちは他の大学と圧倒的な差があったわけではありません。どちらに転んでもおかしくない試合もたくさんありました。そのため今シーズンも決して驕ることなく、謙虚な姿勢で、チーム一丸となって１つずつ戦っていきたいと思います。そして再び本物の勝者になるべく日々練習をしていきたいと思います。

最後になりましたが、顧問の横山正尚先生やＯＢ・ＯＧの先生方をはじめ、高知大学医学部サッカー部を支えてくださっている多くの方々に心より御礼申し上げます。皆様のご期待に添えられますよう、引き続き活動して参りますのでこれからも温かいご支援をよろしくお願いします。

高知大学医学部弓道部

医学科3年生　南　　玲
（医学部弓道部代表）

私たち高知大学医学部弓道部は現在48名の部員が在席しており、高知大学医学部キャンパス敷地内にある弓道場にて活動しております。部活動としては毎週月、水、土曜日の３日を練習時間としていますが、弓道場はいつでも練習することができ、毎日のように弓を引く部員の姿が多く見受けられます。

まず弓道とは、どのような武道なのでしょうか。競技としての弓道といえば、現在多くの大会で用いられる種目として近的が挙げられます。これは、射手より距離にして15間(28m)先に１尺２寸(36cm)の的を置き、これに対して弓を引くというものです。私が弓道をしていると言うと、決まって弓道を知らない友人は「弓道は的の真ん中に中てた方が良いのだろう？」と尋ねてきますが、そんなことはありません。確かに弓道には同心円に模様が入った霞的という的をよく用いますが、弓道には「あたり」か「はずれ」しか存在せず実にシンプルであり、またある種残酷でもあると思います。射手より28mも離れた的は指先程の大きさしかなく、ここに中たるということは簡単なことではありません。試合という形式になると、男子団体では６人が、女子団体では３人が各自４本の矢を持ち順に引くということを５立(回)行い、それぞれ120本、60本引いた内の総的中数によって順位を争います。

それでは私たちの月、水、土曜日の部活動を紹介していきます。月曜日は主に自由練習で、各人が的の前に立ち各々自分の射技(弓の引き方そのもの)を試行錯誤しつつも磨いていきます。当たり前ですが弓を引いている姿は自分では見えないので、上級生達が中心となって教え合っています。弓道部に入部する１年生には大学より弓道を始める初心者も多いですが、半年も経つと同級生同士でも教え合ったりしています。水曜日は、私たち医学部弓道部のＯＢでもある師範の先生をお招きして、ご指導を賜っています。弓道という武道は本当に奥深く難しいため、毎週のように師範の先生にご指導していただけるというは非常に為になっています。土曜日には坐射という、昇級昇段審査に必要な体配(弓道場への入場から弓を引き退場までの一連の所作のこと)を練習します。この練習一番大切で、これがおろそかになっていては弓道がただ的に中てるだけの的あてゲームではな

いと、胸を張って言えません。至誠礼節を伴った綺麗な体配が出来てこそ弓道はカッコいいものと思っています。

多くの先輩より語り継がれていますが、高知大学医学部弓道部の弓道は当て弓(的中することだけにこだわること)ではいけない、基礎をしっかりと練習して正しい射であることを目指しています。平成28年度の試合成績として西日本医科学生総合体育大会弓道部門において男子優勝、女子準優勝を果たし、全日本医科学生総合体育大会王座決定戦へ出場ができたのは、先輩らが引き継いできたもののおかげだと思っています。全医体出場までには、団体のメンバーの努力だけではなく、支援してくださるＯＢ・ＯＧの方々、指導してくれる先輩方、メンバーのために働いてくれる後輩達など、様々な人に支えられていました。弓道で一つの的の前に立つのは自分一人ではあるけれど、試合で結果を残すには全体での協力が不可欠です。医療従事者になる私たちが弓道を通してチームのために支えあうという連携を学べるというのはよい機会と思います。また弓道の教本に書いてある弓道修練の眼目には「人間完成の必要」という項目があります。これは、射はもとより……修練に刻々勉励した、その人の誠意が裏打ちされている、ともあるように、実直に練習を重ねることで医療従事者に必要な誠実さという大切な部分を学んでいけると信じています。

最後になりますが、高知大学医学部弓道部を支えてくださっているＯＢ・ＯＧの先生方をはじめ、多くの方々に心から御礼申し上げます。また、先輩方が脈々と受け継いできたものを今の後輩達をはじめ次へとつなげるために、今日も切磋琢磨していきたいと思います。これからも御指導御鞭撻の程を宜しくお願い申し上げます。

高知大学医学部水泳部

医学科3年生　金　　潔駿
（水泳部部長）

私たち高知大学医学部水泳部はスイマー33名、マネージャー９名の計42名で構成され、顧問に整形外科の池内先生をお迎えして活動しており、夏は岡豊キャンパス、冬はくろしおアリーナにて練習を行っています。また、高知県立大学水泳部や高知工科大学水泳部の皆さんと一緒に練習をしており、他の部活と比べ、他大学との交流が盛んな部活です。

まず、水泳の試合をあまり観たことの無い方が多いのではないでしょうか。広義の水泳とは、競泳、水球、シンクロナイズドスイミング、飛び込みの4種類の競技の総称ですが、一般的に水泳と言うと競泳を指すことがほとんどです。水泳の公式大会は主に50mプール（長水路）で行われます。（もちろん25mプール（短水路）にて行われる公式大会もあります。）近年の日本の水泳界は北島康介選手を初め、松田丈志選手や寺川綾選手など、男女ともに世界でもトップレベルの選手がたくさんいます。最近では池江璃花子選手が中学生で50m自由形の日本新記録を樹立したことや、萩野公介選手がリオオリンピックにおいて400m個人メドレーで金メダルを取ったことは記憶に新しいのではないでしょうか。このように今、日本の水泳界はとても盛り上がりを見せています。

しかし、水泳に苦手意識をお持ちの方はたくさんいらっしゃると思います。高校までとは異なり、大学の部活では経験者ももちろんいますが、ほとんどは大学に入学してから水泳を始めた初心者です。実際に高知大学医学部水泳部においてもスイマーのおよそ６割が大学から水泳を始めた初心者でした。初心者でも練習についていけるのかどうか不安になるかもしれませんが、ご安心ください。水泳部には監督やコーチがおらず、練習メニューも自分たちで作成するため、自分のペースで伸び伸びと練習ができ、初心者の頃からガツガツと泳がせるといったことはありません。特に夏場、岡豊キャンパスのプールで練習をする間は初心者コースを設け、そこである程度の泳力がつくまでは練習をします。また、記録会や大会の度にビデオを撮り、経験者から泳ぎ方について指導していただけるため、初心者から始めてもどんどん泳ぎが上達します。それとは反対に医学部の部活はレベルが低いとお思いの方もいらっしゃるかと思いますが、水泳部には全国大会に出場したことのある選手もたくさんおり、決してレベルは低くありません。また、前述した通り、水泳部は高知県立大学や高知工科大学と合同で練習を行うため、質の高い練習を行っており、同時に良い刺激をもらっています。

次に私たちの主な大会成績についてご紹介します。平成28年度は四国大会・中国四国大会において男女総合優勝、

西医体において男子総合３位という輝かしい成績を残しました。また、西日本コメディカル学生水泳競技大会（以下、コメディカル）におきましても男子200m自由形３位や、女子400m自由形３位といった成果をあげています。最近では四国大会に関しては３連覇、中国四国大会は男子が２連覇を果たしています。西医体につきましても、平成25年度の男子総合３位に始まり、平成26年度の男子総合４位、平成27年度の男子総合２位と、優勝にはあと一歩届かないまでも優勝に準ずる成績を残しています。これは決して経験者のみが頑張って得られたのではなく、初心者から始めた部員たちも一丸となって練習に励んだ結果得られたものです。

水泳はレギュラーというものが無く、初心者から大会に出場することが出来ることも水泳部の魅力の一つではないでしょうか。団体競技ではどうしてもレギュラーが存在するため、初心者から大会に出場できる機会は多くありませんが、水泳ではオープン参加という形になり入賞などの対象外にはなるものの、全員が好きな種目に出場することが出来ます。たくさんの大会に出場し、多くのレースを経験する中で上達し、あるいは課題が見つかり、次の大会へ繋げられますし、モチベーションも維持できます。西医体やコメディカルのような大きな大会であっても全員がレースに出場できるため、レースを通して感じた喜びや悔しさを共有し、結束力が高まるのだと思います。

これからは中国四国大会での男女アベック優勝に加え、四国大会、中国四国大会、西医体、コメディカルの全ての大会で優勝することを目標に掲げ、高知県立大学や高知工科大学の水泳部の皆さんと互いに切磋琢磨し、練習に励んで参ります。また、強さのみを追い求めるのではなく、チームの雰囲気づくりや団結力の育成にも力を入れ、個々人が責任を持って行動し、より優れたチームとなるよう頑張っていきたいと思います。

最後になりましたが、顧問の池内先生をはじめ、ＯＢ・ＯＧの方々、高知県水泳連盟など、高知大学医学部水泳部を支えてくださっているすべての方々に心より御礼申し上げます。また、これからも温かいご支援とご指導ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

南国警察署（防災担当部署）の方と ヘリコプターによる合同防災訓練を通して

災害医療研究会部長　看護学科3年生　吉　原　大　貴

平成28年11月23日、高知大学医学部修志館及び、グランドにて、南国警察署（防災担当部署）の方々と協働し、ヘリコプターによる搬送訓練を実施しました。本訓練では、災害医療研究会が救助者、看護学科２年生が負傷者(うち２人防災担当部署の方)となって、看護学科教員、学生課職員にも参加をして頂きました。実際に地震が起こったことを想定し、限りある資源の中、学生である私たちに何ができ、どのような行動をとればよいのだろうか、参加頂いた方々の防災知識を高めることを目的として実施しました。

11月23日の内容といたしましては、「平成28年11月23日（水）午前９時40分土佐湾沖にするマグニチュード8.5の巨大地震が発生し、震度７の強い揺れを観測（60秒の静止時間を取る）。病院機能は維持しているものの窓ガラスの破損や壁にクラックが発生。ライフラインは断絶している。」と想定し訓練を行いました。流れとしては、災害医療研究会の部員が修志館内で負傷した看護学科２年生に対し、トリアージ（START法）を行った後、日本赤十字救急法を用いて救助し、そのうち重傷者２名（南国警察署防災部署の方）を、担架を用いグランドに駐在しているヘリコプターまで運び、南国警察署の方に負傷者の情報共有し、ヘリコプターで拠点病院へと搬送するというものでした。訓練終了後は南国警察署の方々にヘリコプターの機内の説明や、学生からの質問に答えて頂き、参加者全員で災害について考え、学ぶことができました。

訓練を実施するにあたって、何度も何度も部会を重ね、南国警察署とも打ち合わせを行いました。初めての試みに対し、成功できるのかという不安と戦いながら、部員全員で訓練実施に向けて入念な打ち合わせ、救護法の練習をしてきました。そして訓練当日は準備・練習してきた成果を発揮し、無事に訓練を終了することができました。また、休日にも関わらず参加して頂いた看護学科２年生も、自身に与えられた役割を一生懸命演じて頂きよりリアリティーが増し、部員も練習では味わうこと

のできない雰囲気の中で訓練を行うことができ、沢山のことを感じ、学ぶことができたと思います。

今回の訓練は南国警察署の方と合同の訓練を行うという初の試みでありました。学生や教員ではなく、地域の生活を守る方達との活動というのはとても刺激的で多くのことを学ぶことができました。今後もこのような方たちと一緒になって災害について考えていけたらと思っています。またこの訓練は来年度も続け、今年よりもさらに充実した訓練になるようにしていきたいと思います。

《白衣授与式》

平成28年度『白衣授与式』の実施について

学生課長　立 花 広 枝

平成26年度から、入学式・卒業式に次ぐ新たな医学部の行事として、同窓会組織から臨床実習の始まる医学科５年生に白衣を贈る「白衣授与式」を実施しています。

臨床実習は、直接患者さんと接し１年余かけて様々な体験をしながら医療を学ぶ、極めて重要な実習科目です。医療現場への第一歩を踏み出そうとする学生に対して、実習への心構えと医の倫理の自覚、患者さんに対して持つべき思いやりの心を再認識してもらうことを式の目的としています。

本年度は、４月８日(金)に実施、医学科５年生と保護者、アドバイザー教員、教職員ら約260人が出席し見守る中、学生一人一人にアドバイザー教員から白衣が授与されました。

本家医学部長が「いよいよこれから患者さんを診る実地訓練が始まる。医師としての原点を認識するとともに、将来医師となった後も今日のことを思い出し、医師の道を歩み始めた原点を振り返っていただきたい。」と挨拶後、５年生代表の立道理乃さんが「患者さんを一人の人間として尊重し、生涯にわたり患者さんに寄り添い、支えることのできる医師。個々の医療者がお互いに尊重しあい、円滑なコミュニケーションを重視したチーム医療に貢献できる医師。国際的な視野に立ち地域住民の健康と福祉に十分貢献し得るよう、私たちの能力を社会に還元できる医師になることを約束する。」と宣誓し、厳粛に式が終了しました。

平成28年度「白衣授与式」（平成28年4月8日（金）実施）

《医学部振興基金》

医学部長挨拶

高知大学医学部では、「医学部における教育・研究の推進及び地域医療への貢献等の医学振興に寄与すること」を目的として、平成24年10月に『医学部振興基金』を設立いたしました。皆様方に本基金へのご理解並びにご支援を賜りたく、ご挨拶を申し上げます。

高知大学医学部の前身である高知医科大学は、「敬天愛人」と「真理探究」を建学の理念として昭和51年に開学しました。高知医科大学は医学科単独で開学しましたが、その後平成10年に看護学科を新設し、医師および看護師を養成する高知県唯一の医育高等教育機関として充実を図ってまいりました。平成15年の旧高知大学との統合により、国立高知大学医学部となり、平成16年の国立大学法人化を経て、平成27年度末までに、医学科では3,155人、看護学科では1,023人の卒業生が医師、看護師等医療人として医療界、医学教育界等で活躍しています。さらに、本学の教授職等の教員となる卒業生も多く、学生教育、研究、診療を支えています。また、大学院ではこれまでに、看護学専攻153人、医科学専攻149人、医学専攻518人の方々が課程を修了し、修士あるいは博士の学位を得て我が国の学術研究の発展に貢献する人材を輩出いたしております。

高知県は中山間地が多く超高齢化社会の先進県でありながら、医師不足、専門科の偏在などによる地域医療格差が問題となっています。高知県の医療体制を崩壊させないためには、なるべく多くの卒業生が高知県内の病院、とくに高知大学に残ってもらうことが必要です。そのためには、卒業生がモチベーションをもって気持ち良く働ける職場環境をつくることが重要と思われます。

そこで、開院以来30年以上が経過して狭隘化や老朽化が目立ってきた附属病院の再開発に着手しました。第１ステージとして平成24年1月に新病棟（第二病棟）の建設に着工し、平成26年11月に完成、平成27年4月から稼働を開始しました。この後も旧病棟（第一病棟）、外来棟、中央診療棟の改修を計画しています。平成16年の国立大学法人化以来、各国立大学法人は自助努力で建物施設の再開発を行なうことになり、事実、本学の病院再開発の費用も90%を病院収入で賄っています。

このような状況ですので、念願の医学部交流記念会館（仮称）を、『医学部振興基金』を原資として岡豊キャンパスに建設させていただきたく切にお願い申しあげる次第です。実現したあかつきには、同窓生を中心に、在校生、教職員等、岡豊キャンパスに集う全ての人達のために役立たせていただきます。必ずや、医学部の教育環境の向上、同窓生との交流活発化、地域貢献のさらなる推進に資すると信じています。

関係各位におかれましては、なにとぞ本振興基金の趣旨にご理解とご賛同をいただき、格別のご支援、ご高配を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

平成29年4月

高知大学医学部長　本家 孝一

医学部振興基金の目的及び使途

基金の目的

高知大学医学部振興基金は、医学部の理念である「人間性豊かな良き医療人の育成」、「地域医療に密着した学風づくり（地域貢献）」を推進するため、この理念に沿った医学及び看護学の教育・研究の充実及び地域貢献の役割を果たすため、これらに対する事業の支援とその環境の整備・充実を図ることを目的とする。

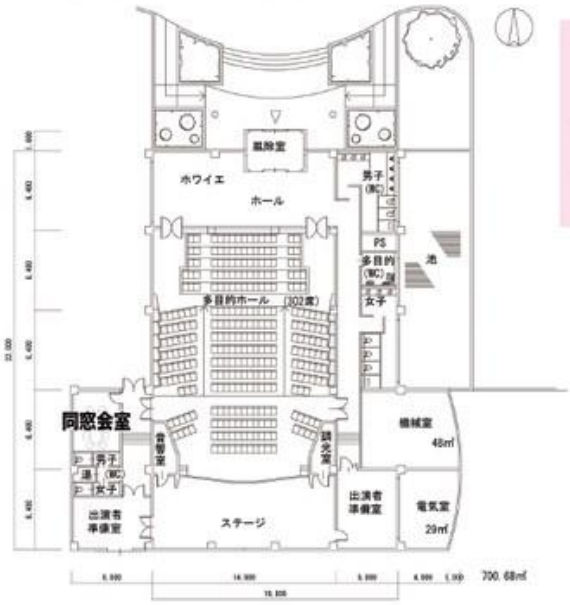
基金の使途について

1. 医学及び看護学の教育・研究に関する事業
2. 医学及び看護学の教育・研究の環境整備に関する事業
3. 人間性豊かな医療人の育成に関する事業
4. 地域医療の支援に関する事業
5. 医学部同窓会等との交流事業
6. その他医学部の運営に関する事業

当面の目標 **高知大学医学部交流記念会館（仮称）の設置**　**目標金額** **3億円**

※目標募金額の増減により、建設規模や設計内容に変更が生じる場合があります。

医学部交流記念会館（仮称）（300席）案



【完成目標年度】

高知医科大学開学後50年となる2028年（平成40年）の完成を目標としております。

医学部交流記念会館（仮称）　S=1/300

■東立面図　S=1/400■　■北立面図　S=1/400■

基金のWebサイト紹介

高知大学ホームページ（http://www.kochi-u.ac.jp/）又は、高知大学医学部ホームページ（http://www.kochi-u.ac.jp/gakubu/igaku/）からクリックしてください。

■ご寄附のご案内・振込方法

募金期間	平成24年10月1日から募金開始
募金の対象者	本基金の趣旨に賛同いただける個人、法人・団体等
ご協力をお願いする金額	個人による寄附金につきましては、1口1千円を単位とします。 法人・団体等による寄附金につきましては、1口1万円を単位とします。 （本基金の趣旨をご理解いただき、なにとぞ複数口でのご協力をお願いいたします。）
寄附手続き	添付の払込取扱票の金額欄及びご依頼人・通信欄にご記入いただき、下記「ご寄附の振込方法」によりお振込をお願いします。
ご寄附の振込方法	【お振込先】 ◆受取人口座名義：国立大学法人高知大学 ◆指定金融機関・口座番号 ゆうちょ銀行　振替口座　口座記号番号　０１６３０－１－６８９３３ 高知銀行　大津支店　普通　口座番号　３０１３３５８ 四国銀行　大津支店　普通　口座番号　５１１１４８２ **指定金融機関からお振込いただく場合** ●添付の払込取扱票により上記の指定金融機関の本・支店窓口でお振込をお願いいたします。 ●払込取扱票は、ゆうちょ銀行又は郵便局の払込機能付きＡＴＭでもご利用いただけますが、高知銀行及び四国銀行のＡＴＭでは取扱いできませんので、ご注意ください。 ●振込手数料は不要（高知大学が負担）となっておりますので、金額欄には寄附金額をご記入ください。 **その他の金融機関からお振込いただく場合** ●添付の払込取扱票により上記以外の金融機関でお振込される場合は、寄附金額から振込手数料を差し引いた金額をご記入いただき、振込手数料と合わせてお振込の手続きをお願いします。この場合、振込手数料を含めた金額を寄附金として取扱いいたします。（例:1万円ご寄附いただく際に1,000円の手数料を必要とする場合、9,000円をお振込いただきましたら、1万円のご寄附として管理いたします。） **その他** ・受領書やご利用（控）等は、大学から領収書が届くまで大切に保管しておいてくださるようお願いいたします。

■税制上の優遇措置

高知大学への寄附金については、税制上の優遇措置が受けられます。
本学が発行する「寄附金領収書」を添えて、確定申告により手続きをお取りください。

個人からのご寄附	寄附金額が2千円を超える場合、その超えた金額が当該年の所得から控除されます。ただし、寄附金の額が総所得の40%を上回る場合は、40%が限度となります。（所得税法第78条第2項第2号） 所得税の軽減額＝（寄附金額※1 －2,000円）× 所得税の税率　※1 総所得額の 40%を限度 寄附された翌年の1月1日に高知県にお住まいの方は「県民税」のみ、高知市にお住まいの方は「県民税」に加え「市民税」についても、以下の軽減処置があります。2千円を超え総所得額の30%までの寄附金額に対し、県民税は4%、市民税は6%を乗じた額が控除されます。（高知県税条例、高知市税条例） 個人住民税の軽減額 ・県民税＝（寄附金額※2 －2,000円）×4% ・市民税＝（寄附金額※2 －2,000円）×6% ※2 総所得額の 30%を限度
法人からのご寄附	寄附金の全額を損金に算入できます。（法人税法第37条第3項第2号）

お問い合わせ先

〒783-8505　高知県南国市岡豊町小蓮
高知大学医学部・病院事務部　総務企画課　総務係
TEL：088-880-2221
FAX：088-880-2227
E-mail：is04@kochi-u.ac.jp

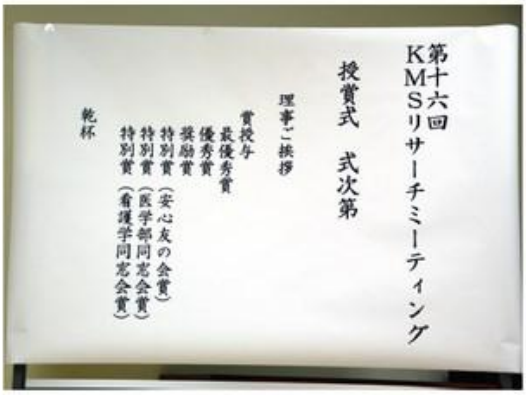
《医学部准教授講師会の活動》

「KMSリサーチミーティング」

医学部看護学科准講会　副会長　　松　岡　真　里
（看護学科　臨床看護学講座　小児看護学）

高知大学医学部准教授講師会は、高知県内の大学・研究機関で行われている医学・医療に関わる研究に関して、発表、意見交換を行い、新たなアイデア、連携を創出することを目的として、KMSリサーチミーティングを主催しています。平成28年度は、平成29年2月22日（水）23日（木）の両日に開催されました。今年も、医学科、看護学科をはじめ附属病院などから、42演題もの一般演題が集まりました。今回で16回目となりましたが、両日とも、たくさんの方にご参加いただき、ポスターセッション形式の発表では、活発な意見交換が行われていました。今回の発表でも、基礎研究から臨床研究まで、昨年にも勝りトップレベルの研究成果であり、演者の方々の医学・医療に対する情熱と研究に取り組む姿に感銘を受けました。また、医学部先端コースの学生の研究や、看護学科4年生が一年間かけて真摯に取り組んできた卒業研究論文の一部も発表されており、学生のうちから研究への関心が高められていることを確認することができました。今後は、今回発表くださった演題の多くが学術論文として発表され、さらに発展することが期待されます。また、今年も、本会の開催にあたり、高知大学学長、医学部長、医療学系長、学科長、医学部附属病院長をはじめ、医学部教授会、高知大学医師会、医学部同窓会、看護学科同窓会、豊仁会、高知信用金庫安心友の会など、多くの皆様のご支援とご協力を頂き、優秀な演題に対して表彰を行うことができました。今年は、最優秀章を受賞した皮膚科学の大湖健太郎先生をはじめ計14名の方が受賞されました（以下、「第16回KMSリサーチミーティング受賞者一覧」参照）。

医学部准教授講師会は、会員相互の親睦と連絡の円滑をはかるとともに、医学・看護学教育や研究および診療や看護実践への協力を通して、今後も本学の発展に努めて参ります。今後とも、皆様方からのなおいっそうのご支援・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



授与者　渡橋教授、授賞者　橋田助教

第16回 KMSリサーチミーティング受賞者一覧

賞	受賞者氏名	所　属	発　表　演　題
最優秀賞	大　湖　健太郎	皮膚科	Psoriasis development is required for cooperative IL-36R signal in dendritic cells and keratinocytes
優秀賞 (4名)	橋　田　裕美子	微生物学	健常皮膚における「がんウイルス」のエコロジー
	谷　口　睦　男	統合生理学	マウス副嗅球僧帽細胞－顆粒細胞間相反性シナプス伝達抑制を介したバゾプレシンのフェロモン情報処理修飾作用
	川　本　常　喬	外科学(外科2)	呼吸器外科手術における肋間筋弁の血流評価
	MBELAMBELAPAPY ETONGOLA	環境医学	Occupation exposed to Road-Traffic Emissions and respiratory health among Congolese Transit Workers, particularly Bus conductors, in Kinshasa: A cross-sectional study
奨励賞 (5名)	Juan José Lauthier	寄生虫学	Development of a Multilocus Sequence Typing scheme (MLST) to resolve the major taxonomical level of Leishmania spp.
	田　村　友　里	医学科4年生(先端コース)・先端医療学推進センター・総合研究センター・産科婦人科	マウス新生仔末梢血幹細胞からNK細胞への選択的分化誘導およびその抗腫瘍活性の検討
	石　元　達　士	皮膚科	Intralesional blood, an easy-to-access tool for determination of diffusible mediators by skin lesions
	田　上　裕　貴	看護学科4年生 他4名	精神障がい者競技スポーツの心理社会的効果「フットサル」「バレーボール」チームへの参与観察・インタビューを通して
	山　本　麻梨乃	外科学(外科2)	肺悪性腫瘍内部で直接的に測定した乳酸値の臨床的意義
安心友の会賞	明　間　　陵	放射線部	胸部正面撮影における体格による線量変化とDiagnostic Reference Levelとの比較検討
医学部同窓会賞	久　保　　享	老年病・循環器内科学	地域在住肥大型心筋症患者の予後：高知県心筋症ネットワーク(Kochi RYOMA Study)
	龍　治　修　一	医学科2年生(先端コース)・泌尿器科・病理学	ヒト前立腺癌細胞株を用いたphotodynamic therapyの検討
看護学同窓会賞	倉　本　佳　奈	看護学科4年生 他5名	看護系大学生におけるバーンアウトと人間関係の関連

《資料》

◆平成28年度入学試験

平成28年度の医学部入学試験について、医学科は、ＡＯ入試。が平成27年８月28日(金)に１次、平成27年10月６日(火)～16日(金)に２次の試験が実施され、推薦入試「 が平成27年12月９日（水）～11日（金）に、前期日程試験が平成28年２月25日(木)・26日(金)に実施された。看護学科は、推薦入試。が平成27年11月14日(土)に、前期日程試験が平成28年２月25日(木)に、後期日程試験が平成28年３月12日(土)に実施された。

志願者・受験者・入学者数

年度	学部 学科	志願者 数	受験者 数	入学者 数	入学者の内訳					
					県内	県外	男	女	卒見込者	既卒者等
28	医学部 医学科	人 563 男359 女204	人 503 男318 女185	人 110 男77 女33	人 31 男16 女15	人 79 男61 女18	人 77	人 33	人 26	人 84
	医学部 看護学科	人 273 男 34 女239	人 176 男 23 女153	人 60 男10 女50	人 29 男 4 女25	人 31 男 6 女25	人 10	人 50	人 51	人 9

年度	学部 学科	志願者 数	受験者 数	入学者 数	入学者の内訳					
					県内	県外	男	女	卒見込者	既卒者等
27	医学部 医学科	人 705 男484 女221	人 518 男333 女185	人 110 男85 女25	人 28 男18 女10	人 82 男67 女15	人 85	人 25	人 35	人 75
	医学部 看護学科	人 247 男 23 女224	人 175 男 16 女159	人 60 男 3 女57	人 20 男 0 女20	人 40 男 3 女37	人 3	人 57	人 52	人 8

年度	学部 学科	志願者 数	受験者 数	入学者 数	入学者の内訳					
					県内	県外	男	女	卒見込者	既卒者等
26	医学部 医学科	人 637 男412 女225	人 533 男330 女203	人 110 男82 女28	人 27 男17 女10	人 83 男65 女18	人 82	人 28	人 31	人 79
	医学部 看護学科	人 388 男 54 女334	人 283 男 39 女244	人 60 男 9 女51	人 17 男 2 女15	人 43 男 7 女36	人 9	人 51	人 43	人 17

◆平成28年度学生数

学部学生　　平成28年5月1日現在

学科	医学科							看護学科					合計
年次	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	4	計	
男	79	102	87	77	71	71	487	10	4	8	10	32	519
女	33	28	30	44	35	47	217	51	59	58	57	225	442
計	112	130	117	121	106	118	704	61	63	66	67	257	961

大学院学生　　平成28年5月1日現在

課程 専攻	博士課程					修士課程						合計
						医科学専攻			看護学専攻			
年次	1	2	3	4	計	1	2	計	1	2	計	
男	16 (2)	22 (1)	10	47 (1)	95 (4)	6 (1)	10	16 (1)	0	0	0	16 (1)
女	6 (1)	6	5	27 (1)	44 (2)	5 (1)	9 (1)	14 (2)	17	14	31	45 (2)
計	22 (3)	28 (1)	15	74 (2)	139 (6)	11 (2)	19 (1)	30 (3)	17	14	31	61 (3)

備考　(　　)は，外国人留学生数で内数

◆医師国家試験合格状況

回数及び実施年	卒業生	受験者			合格者			合格率			総合順位	国立大学順位
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計		
		名	名	名	名	名	名	%	%	%		
第77回 昭和59年	第1期生 97名	97	−	97	97	−	97	100.0	−	100.0	1 /76	1 /39
第79回 昭和60年	第2期生 85名	85	−	85	82	−	82	96.5	−	96.5	8 /76	5 /39
第80回 昭和61年	第3期生 105名	105	3	108	99	2	101	94.3	66.7	93.5	18/79	14/42
第81回 昭和62年	第4期生 89名	89	7	96	83	5	88	93.3	71.4	91.7	28/80	22/43
第82回 昭和63年	第5期生 107名	106	8	114	103	5	108	97.2	62.5	94.7	6 /80	4 /43
第83回 平成 1 年	第6期生 101名	101	7	108	94	7	101	93.1	100.0	93.5	15/80	9 /43
第84回 平成 2 年	第7期生 91名	91	7	98	87	7	94	95.6	100.0	95.9	4 /80	2 /43
第85回 平成 3 年	第8期生 99名	99	4	103	86	2	88	86.9	50.0	85.4	49/80	35/43
第86回 平成 4 年	第9期生 101名	101	15	116	94	10	104	93.1	66.7	89.7	19/80	12/43
第87回 平成 5 年	第10期生 101名	100	11	111	92	9	101	92.0	81.8	91.0	44/80	29/43
第88回 平成 6 年	第11期生 95名	94	11	105	92	6	98	97.9	54.5	93.3	11/80	8 /43
第89回 平成 7 年	第12期生 101名	101	8	109	97	4	101	96.0	50.0	92.7	17/80	9 /43
第90回 平成 8 年	第13期生 82名	82	9	91	80	7	87	97.6	77.8	95.6	17/80	8 /43
第91回 平成 9 年	第14期生 95名	94	4	98	88	0	88	93.6	0.0	89.8	39/80	22/43
第92回 平成10年	第15期生 101名	101	10	111	91	5	96	90.1	50.0	86.5	66/80	39/43
第93回 平成11年	第16期生 97名	97	16	113	85	10	95	87.6	62.5	84.1	52/80	36/43
第94回 平成12年	第17期生 86名	86	18	104	79	7	86	91.9	38.9	82.7	34/80	23/43
第95回 平成13年	第18期生 92名	92	18	110	84	13	97	91.3	72.2	88.2	63/80	42/43
第96回 平成14年	第19期生 97名	97	13	110	93	9	102	95.9	69.2	92.7	33/80	21/43
第97回 平成15年	第20期生 89名	89	7	96	81	4	85	91.0	57.1	88.5	54/80	31/43
第98回 平成16年	第21期生 101名	101	11	112	96	6	102	95.0	54.5	91.1	32/80	21/43
第99回 平成17年	第1期生 98名	98	10	108	92	5	97	93.9	50.0	89.8	45/80	26/43
第100回 平成18年	第2期生 99名	99	10	109	90	7	97	90.9	70.0	89.0	53/80	30/43
第101回 平成19年	第3期生 90名	90	12	102	83	5	88	92.2	41.7	86.3	55/80	35/43
第102回 平成20年	第4期生 88名	88	13	101	81	5	86	92.0	38.5	85.1	71/80	41/43
第103回 平成21年	第5期生 90名	90	13	103	82	8	90	91.1	61.5	87.4	67/80	40/43
第104回 平成22年	第6期生 90名	90	14	104	82	8	90	91.1	57.1	86.5	65/80	42/43
第105回 平成23年	第7期生 97名	96	13	109	89	7	96	92.7	53.8	88.1	55/80	32/43
第106回 平成24年	第8期生 93名	92	15	107	87	9	96	94.6	60.0	89.7	51/80	25/43

回数及び実施年	卒業生	受験者			合格者			合格率			総合順位	国立大学順位
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計		
第107回 平成25年	第9期生 88名	名 88	名 12	名 100	名 70	名 6	名 76	% 79.5	% 50.0	% 76.0	79/80	43/43
第108回 平成26年	第10期生 101名	99	22	121	89	16	105	89.9	72.7	86.8	73/80	42/43
第109回 平成27年	第11期生 100名	100	19	119	94	8	102	94.0	42.1	85.7	76/80	42/43
第110回 平成28年	第12期生 109名	109	15	124	102	7	109	93.6%	46.7%	87.9%	71/80	40/43
合計	3,155名	3,147	355	3,502	2,924	209	3,133	−	−	−	−	−

◆保健師・看護師国家試験合格状況

卒業生	保健師										看護師										
	回数及び実施年	受験者			合格者			合格率			回数及び実施年	受験者			合格者			合格率			
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	
		名	名	名	名	名	名	%	%	%		名	名	名	名	名	名	%	%	%	
第1期生 62名	第88回 平成14年	62	—	62	47	—	47	75.8	—	75.8	第91回 平成14年	51	—	51	50	—	50	98.0	—	98.0	
第2期生 73名	第89回 平成15年	73	12	85	71	10	81	97.3	83.3	95.3	第92回 平成15年	62	1	63	60	1	61	96.8	100.0	96.8	
第3期生 66名	第90回 平成16年	66	1	67	66	0	66	100.0	0.0	98.5	第93回 平成16年	56	2	58	53	1	54	94.6	50.0	93.1	
第1期生 64名	第91回 平成17年	64	2	66	60	0	60	93.8	0.0	90.9	第94回 平成17年	54	4	58	54	3	57	100.0	75.0	98.3	
第2期生 74名	第92回 平成18年	74	3	77	57	2	59	77.0	66.7	76.6	第95回 平成18年	64	1	65	62	0	62	96.9	0.0	95.4	
第3期生 66名	第93回 平成19年	66	11	77	65	11	76	98.5	100.0	98.7	第96回 平成19年	57	3	60	57	1	58	100.0	33.3	96.7	
第4期生 68名	第94回 平成20年	68	3	71	67	2	69	98.5	66.7	97.2	第97回 平成20年	58	2	60	57	1	58	98.3	50.0	96.7	
第5期生 69名	第95回 平成21年	69	1	70	68	1	69	98.6	100.0	98.6	第98回 平成21年	59	2	61	58	1	59	98.3	50.0	96.7	
第6期生 64名	第96回 平成22年	64	—	64	60	—	60	93.8	—	93.8	第99回 平成22年	55	1	56	54	0	54	98.2	0.0	96.4	
第7期生 73名	第97回 平成23年	72	4	76	70	2	72	97.2	50.0	94.7	第100回 平成23年	64	2	66	64	1	65	100.0	50.0	98.5	
第8期生 66名	第98回 平成24年	66	2	68	65	2	67	98.5	100.0	98.5	第101回 平成24年	58	1	59	58	1	59	100.0	100.0	100.0	
第9期生 65名	第99回 平成25年	65	2	67	65	2	67	100.0	100.0	100.0	第102回 平成25年	57	—	57	54	—	54	94.7	—	94.7	
第10期生 71名	第100回 平成26年	70	—	70	68	—	68	97.1	—	97.1	第103回 平成26年	61	3	64	58	2	60	95.1	66.7	93.8	
第11期生 72名	第101回 平成27年	72	2	74	72	2	74	100.0	100.0	100.0	第104回 平成27年	63	4	67	60	4	64	95.2	100.0	95.5	
第12期生 70名	第102回 平成28年	54	1	55	54	1	55	100.0	100.0	100.0	第105回 平成28年	60	3	63	58	2	60	96.7	66.7	95.2	
1,023名	合計	1,005	44	1,049	955	35	990	—	—	—	合計	879	29	908	857	18	875	—	—	—	

◆助産師国家試験合格状況

修了生	助産師									
	回数及び実施年	受験者			合格者			合格率		
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計
		名	名	名	名	名	名	%	%	%
第1期生 6名	第96回 平成25年	6	−	6	6	−	6	100.0	−	100.0
第2期生 3名	第97回 平成26年	3	−	3	3	−	3	100.0	−	100.0
第3期生 6名	第98回 平成27年	6	−	6	6	−	6	100.0	−	100.0
第4期生 6名	第99回 平成28年	6	−	6	6	−	6	100.0	−	100.0
21名	合計	21	−	21	21	−	21	−	−	−

※総合人間自然科学研究科修士課程看護学専攻母子看護学分野・実践助産学課程のみの数

◆平成28年度 医学部後援会 被表彰団体・個人一覧

《団体》第68回西日本医科学生総合体育大会　■総合成績：6位

団体名	順位	成績
医学部サッカー部	優勝	
医学部弓道部	優勝	男子団体
医学部弓道部	準優勝	女子団体
水泳部	3位	男子団体　男子400mメドレーリレー

《個人》第68回西日本医科学生総合体育大会

氏名	学科学年	順位	団体名	成績
市川瑠里子	医学科4年	優勝	水泳部	女子50mバタフライ
三野比花里	医学科2年	優勝	陸上競技部	円盤投
塩見　真章	医学科2年	準優勝	水泳部	男子200m個人メドレー
前田　充毅	医学科6年	準優勝	水泳部	男子200m平泳ぎ
大森　麻未	医学科4年	3位	医学部バドミントン部	女子個人ダブルス
今井　麻央	医学科4年			
小松明日香	医学科5年	3位	医学部柔道部	女子個人戦
坂井　隆志	医学科3年	3位	陸上競技部	男子1500m
柴田　直季	医学科5年	3位	医学部卓球部	男子個人ダブルス
竹崎　一皓	医学科1年			

《団体》第50回全日本医科学生体育大会王座決定戦

団体名	順位	成績
医学部サッカー部	準優勝	

《個人》第50回全日本医科学生体育大会王座決定戦

氏名	学科学年	順位	団体名	成績
白石　裕雅	医学科4年	準優勝	医学部弓道部	弓道部門個人

《団体》西日本看護学生（コメディカル）体育大会

団体名	順位	成績
医学部バスケットボール部	準優勝	女子団体

《個人》西日本看護学生（コメディカル）体育大会

氏名	学科学年	順位	団体名	成績
古谷　優季	看護学科1年	3位	水泳部	女子400m自由形
村上　航平	看護学科3年	3位	水泳部	男子200m自由形

編集後記

まず、このたびの熊本地震あるいは鳥取県中部地震により、被害を受けられた方々に心よりお見舞い申し上げます。皆様の安全と被災地の１日も早い復旧をお祈り申し上げます。

本年度より、おこうだより編集委員会委員長を仰せつかりました　井上啓史です。微力ではありますが、高知大学医学部と学部学生の“今”を伝え、未来に繋がる広報誌となるように努めたいと思います。

本号では、「医学部教育の取り組み」に加えて、本年４月に医療人育成支援を目指して新たに開設された「医療人育成支援センター」、さらには「医学部後援会や同窓会の支援」を特集記事「地域に根ざした医療人の育成」として取り上げさせて頂きました。学生のみならず、初期臨床研修医、さらには専門医以降までも育成支援する高知大学医学部の手厚い教育をより深くご理解頂けると思います。

また、退官される教員および新たに就任された教員からのご挨拶、看護学科防災訓練の実施について、学生の活動、同窓会の活動など、いずれも、まさに高知大学医学部と学部学生の“今”が伝わる、刮目すべき話題ばかりであり、読者のみなさまにご満足頂けるものと信じております。

本号の表紙に取り上げた西日本学生総合体育大会の優勝の熱気を受けて、次号も、熱く、楽しく、元気いっぱいの話題をお伝えしたいと思います。

おこうだより編集委員会委員長
井上　啓史

編　集　井上　啓史、降幡　睦夫、小林　道也、阿波谷敏英
濱田佳代子、森木　妙子、今村　　潤、山崎　直仁
発　行　高知大学医学部おこうだより編集委員会
所在地　高知県南国市岡豊町小蓮　TEL(088)866－5811(代)
発行日　平成29年3月
印　刷　有限会社 三宮印刷　TEL(088)833－3412